
幽霊だって

天月みいこ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

幽霊だつて

【Nコード】

N5394S

【作者名】

天月みいこ

【あらすじ】

気がついたら現世に舞い戻っていた少女・詩織。幽霊としての生活が始まる。

現世

最初に目に入って来たのは限りない闇だった。

何がどうしてこうなったのか心底疑問に思うが、私はお墓の前に、独りポツンとつつ立っていた。しかも、夜にも拘わらずだ。

この状況に至ったまでの記憶はおろか、今まで生きてきた記憶がすっぽりと抜け落ちていた。しかしこれといった外傷もない。どうやら、何者かに拉致されたとか、そういうたぐいではないらしい。見回せど、そこにあるのは無数の墓のみ。いや、他にも供えられた花などはあるのだけれども。

ひとまず落ち着いて考えてみよう。ここは墓だ、間違いない。

じゃあ、私は？ ありえない自問。そしてやはり何も思い出せない。

「詩織」

「っー！」

頭の中に響いた温かな声。それは何度も何度も聞いた、彼が私を呼ぶ声だった。

私の名前は 詩織。

良かった。「私はだあれ？」なんて笑えない冗談はとりあえず言わなくて済みそうだ。しかしそれ以外は、彼の事を含め、何も思い出せない。

何気なく目の前の墓石に手を伸ばし、ペタペタと触れてみる。すると予想通りひんやりとした感触が手に伝わって来た。

「ねえ君、そんな所で何してるの？」

と、その時背後から声が掛かった。

現世（後書き）

お暇でしたら感想や意見、誤字脱字の指摘などをしていただけると嬉しいです。

美少年

声変わりを終えているであろう低い声。それでいながら、今まで聞いたことがないほど澄んでいた。(実際は記憶がないので、聞いたことがないほどかは分からないけど)

「ねえ、聞こえてる？ 何してるのかって訊いてるんだよ」と、かかった声はさつきよりも若干苛立ちを含んでいた。

右も左もわからないようなこの状況でこれ以上彼の機嫌を損ねるのは得策ではないと判断し、美声の彼の方へと振り返った。

「すみません。少し考え事をしてしまっていたので」

視界に入ってきたのは、予想通りに男の子ではあった。しかし、驚いた。その容姿に。

サラサラの髪は無造作に、かといっていい加減ではなく、切りそろえられていて、前髪から2つの切れ長の瞳を覗かせていた。

夜の漆黒と相まって、その姿は絵本の中から出て来た妖精かと思うほど神秘的で美しいものだった。

「で、結局貴女はそこで何してるの？」

問われて、ふと現実を引き戻される。

質問の答えを考えてみたが、全く思い当たらない。むしろ私が知りたいくらいだった。

「えっと……名前は詩織です」

と、とりあえず知っている事だけ伝えてみた。

「そんな事を訊いてるわけじゃないんだけど……。まあ、いいか」グイツと腕を掴まれ、おもむろに引つ張られる。細身に似合わず案外力が強い。って、そんな場合じゃない。

「ちよつ……！ 何するんですか！」

「うるさいな。不審者である君をうちに連れていくんだよ」

話している間にも、ズルズルと引きずられ、足元に敷き詰められた形の良い小石達が私の足が通った所に道を作っていた。

「なっ！ 嫌だ！ 家になんか連れ込んで何するつもり？」

言った後、しまったと後悔したが、遅かった。

振り返った彼は、目を細めると同時に私の頭に拳骨を振り下ろした。

脳天に響く衝撃。痛くはなかったけど、首が縮むかと思った。

「バカ言わないでくれる？ ほら見て、うちって言うのはそこ」

そう言って彼はピシッと指差した。その先に目をやるとそこにはお寺とそれに隣接するように立っている家が一軒。

「僕、この寺の住職の息子なんだ。うちに着いたら、何をしようとしたのかあらいざらい吐いてもらっよ」

口ひげのおじさん

謎の少年の家に連れられて行くと、口ひげが特徴的で人の良さそうなおじさんが出迎えてくれた。

「ただいま、父さん」

「おかえり、昴。ん？ そっちの女の子は？」

会話から察するに、この口ひげのおじさんは謎の少年のお父さんらしい。あまり似ていない。そして謎の少年の名前が昴だということも分かった。

私はおじさんの視線を受け、自分の置かれた状況を説明しようと躊躇いながらも口を開いた。

「あ、あの私、」

「墓荒らしだよ。例の墓の前に立ってたんだ」

「ち、ちがつ……！」

私の言葉は昴君に見事に遮られた。

このまま覚えのない罪を着せられては敵わない。その一心で、潔白を証明しようと再度口を開くが、私自身、私は何者であんな所で何していたかが分からない。そんな状態で上手く説明できるわけもなく、結局なんの弁解も口にする事が出来なかった。

ふう、とため息が一つ。私のもんじゃない。顔をあげてみると昴君のお父さんが目を閉じたまま、眉間に深いしわを寄せていた。

何か言われるのか。それとも、警察につきだされるのか。いずれにしても私にとっていい事ではない。

次に発せられる言葉に内心、（悪い意味で）ドキドキしながらおじさんを見ていた。

「まさか、信じられない……」

と、おじさんはポツリとこぼした。

何が信じられないのか。おじさんの考えている事の見当がまるでつかない。

おじさんは私をチラツと見ては口を開きかけるが、言葉が出てくる事はなかった。それが数回繰り返された。

「……ねえ。いい加減にしてくれる？」

記憶に新しい苛立ちを含んだ声。昴君だ。

「さつきから口を開いたり閉じたり。言いたい事があるならさつきと言つてよ」

昴君の言葉を最後にシンと静まりかえる室内。

おじさんがゴクリと唾を飲むのが分かった。

「昴。お前、幽霊って信じるか？」

またも部屋には沈黙が訪れた。一つ違うのはその沈黙がさつきよりも間の抜けたものだと言つ事。

「何言つてるの、父さん」

頭は大丈夫か、と昴君が冷たい視線を向けるが、おじさんの方はそんな冗談も耳に入らないほど真剣な顔をしていた。

幽霊

私もなんの冗談かと思った。インターネットを使って、地球の裏側の人とコミュニケーションをとれる時代に幽霊？ ふざけているのか、はたまた気でも触れてしまったのか。

「そう言えば、名前を訊いてなかったね」

しかし、そんな風には見えない。

「あ、えっと、名字は覚えてないんですけど……名前は詩織です」「そうか」

その後、おじさんが小さく、やっぱり、と言ったのを私は聞き逃さなかった。

「昴、詩織さんは例のお墓の前に居たと言ってたな」

「うん。確かに、この人はあそこにつつ立ってたよ」

「あそこの墓に埋葬されている人の名前は？」

「確か、岡本」

昴君はそこで一旦区切り、息を飲み込んだ。

「岡本、詩織……！」

眼球が落つこちるかと思う位に目を見開く昴君。そして私も同じくらいに目を見開いていた。

私は飲み込んだ唾でのどを潤した。

「まさか 私が幽霊だって言いたいんですか？」

息がつまる緊張感に押しつぶされてしまいそうな私と、そんな訳ないと思える冷静な私が居る。

でも、心のどこかで答えは出ていた。

「……」

無言でうなずくおじさんを見た時、ああやっぱり、って妙に納得できた。

非現実的だと頭の中では解かっていた。それはもうものすごく。けれどそれとは別に、墓、夜、とくれば誰でも幽霊を連想できると

も思った。

「昴、覚えておけよ。彼女の様になんらかの要因でこの世に魂がさまよい出てくる事もあるという事を」

重々しいおじさんの声に対し、昴君は今でも胡散臭そうな顔をして私を見ている。もしかしたらまだ慕荒らしだと思っているのかもしれない。

居候

「僕はまだ信じてないから」

昴君は部屋に入ってくるなりそう言った。

私の事を幽霊と認めた昴君のお父さん（怜治さんと言つらしい）は行くあてのない私に部屋を貸してくれた。

本来の私なら、そんなずうずうしい真似できない、と言って丁重にお断りするのだけれど、それはできなかった。実際のところ私には行くあてどころか帰る場所さえもない。しかも怜治さんの言う通り私が幽霊ならば、すでに死んだ事になっているはず。となると、もちろん戸籍も存在しない訳で、私ひとりでは部屋を借りることもバイトをすることもできない。つまり、ここのお寺に厄介になる以外他に方法はなかった。

住む場所を提供してもらった私にとつての当面の問題は、目の前で私に冷ややかな視線を送っている昴君だけだった。

「なんのつもりで偽名まで使つてうちにあがりこんだか知らないけど、僕の目の黒いうちは好きな事はさせないから」

昴君は凜とした佇まいで私を睨みつける。

傍で見ていたらきつと絵になるだろう、と苦笑した。睨みつけられている私としては、容姿が良い分だけ嫌われるのは普通以上に堪える。

「まったく、父さんも何を考えてるんだか……。幽霊なんているわけがないのに」

「その考え方はお寺の息子としてどうかと思うけど」
しまった、うっかり口が滑った。

およそお寺の子、将来はきつと住職になるであろう人間の発言とは思えないそれに思わずツッコミをいれてしまった。しかも、相手は機嫌が良いわけでもない。いや、むしろ悪い。

「まったく、君は何も分かってない」

ため息混じりにそう言いながら、昴君は私の隣に腰を下ろした。

痛み

「本当に、幽霊なんて存在すると思ってるの？」

「そ、それは」

居る、と思ってる。それどころか、私自身がそうだって認めてる。けれど、口に出す事はしない。それは質問と言っよりも、明らかに昴君の意見だったから。

「お寺の役目は死んだ人間の供養なんかじゃない。死んだ人間を想って悲しむ人達の心の痛みを少しでも和らげるために存在するのさ。死んだ後幸せになってるから気にする事はない、ってね」

意外だ。私の想像では「幽霊なんて人間の目の錯覚が生み出した幻想だよ。大体の話は科学的根拠だってあるしね」なんて突っぱねられると思っていたから、こつも人情味のある事を言われるんで、ホント、予想外。

「なんて顔してるのさ。心外だよ」

どうやら、顔に出していたらしい。私は苦笑いでごまかした。

「納得できないなら別に構わないよ。そんな話をしに来た訳でもないしね。ほら、頭見せて」

そう言いつつ、昴君は片手で軽く手招き。逆の手は小さな木箱に軽く置いたまま。

私はアホみたいに口を半開きにしたまま昴君の様子を伺った。

「馬鹿面しないで早く頭見せて」

再度手招きをされるが、言葉もジェスチャーも全く意味が分からない。

「……」

行動を起こさない私を、今度は無言で手招きした。酷く睨みつけながら。

意味は分からないけれど、昴君の機嫌が急降下していくのは分かる。私はよく意味を理解しないまま、頭を昴君につきだした。

「あれ？ 確かこの辺じゃなかった？」

脳天を行ったり来たりする手。

ああ、きつと髪の毛はぐしゃぐしゃなんだろうな。

「ねえ、さっき僕が殴った所どこ？」

「ん？ ちょうど昂君が触ってるあたりだよ」

「嘘。ここら辺全然腫れてないよ」

「だって、腫れるほど痛くなかったもん」

「は？」

昂君にしては、間抜けな声が漏れる。

チラリと表情を伺うと綺麗な白い肌に、正確には眉間に、しわが寄っていた。

「手加減なんてしたつもりはないんだけどな」

「え……」

ボソリ、と誰にもなく呟くその姿は嘘を言っているようには感じない。

昂君、君って人は女の子の頭を腫れるまでに殴るんですか……。

いや。それよりも気になるのはあの時、それほど痛くなかったという事実。

木箱

「昴君、もしかしてあの時本気で殴ったの？」

「もちろん」

間髪入れずに返って来た答えにゾツとしたものの、今はそれよりも気になる事がある。

「あのさ、全然痛くなかったんだけど……」

「……っ！ まさか」

昴君は一言呟くと同時に、私が反応するよりも早く私の頭に拳を振り下ろした。脳天には拳が当たった感覚があるものの、やはり、痛くはない。

私の全く痛がらない様子を見ると、

「と、父さーん！」

と、大きな声で呼びながら部屋を出た。

後を追おうかと迷ったものの、特に何も言われていなかったの、私は部屋で昴君の帰りを待つ事にした。

なんとなしに目に入って来たのは昴君の持つて来た木の箱。これを置いていってしまった事が、昴君がきつとすぐに戻ってくると思った要因ではあるものの、一体何が入っているのか……。

緩く作った拳で軽く叩いてみるが、あまり響かない。他人様の置いていったものを勝手に触るのはあまりにも不躰だと自分に言い聞かせた。

中を開けて確認してみたい好奇心を押さえて、大人しく昴君の帰りを待った。

無痛

数分の後、昴君は戻って来た。しかしその表情は妙に険しかった。「ど、どうし」

「岡本詩織」

どうしたの、と私が言い終わらないうちに、昴君は何故か私の名前を呼んだ。いや、『呼んだ』と言うよりも『言った』と言う方が正しいようなイントネーションだ。

「それが君の名前だったね」

「え、あ、はい。まあ……」

えらく歯切れの悪い言葉になってしまったが、まあ仕方ない。実際、私の記憶に残っていたのは『詩織』という名前だけ。名字の方の『岡本』に対する記憶はないわけで、さつき怜治さんが言っていたから自分の名字だと知っているというだけ。本当にただそれだけだから、「岡本詩織か？」なんて訊かれても、自分の事なのに「たぶん」としか答えようがない。

「君が、」

ゴクリ、と昴君が唾を飲む。

「幽霊であると、認めよう」

「え……」

先程まで、ほんの数分前まで「幽霊の存在を認めない」と声高に言っていた彼が私を幽霊だと認めるまでにどれほどの葛藤があったのだろうか。

額にじんわりとにじんでいる汗が、どれ程幽霊を信じていなかったかを表している。

気になる。一体どんな話をしてきたんだ。

「父さんに聞いたんだ」

細々とした声で話し出す昴君。

「詩織が怪我もしないし、痛みも感じないって事を父さんに話した

ら……思い出してもイライラするくらいにあっさりこう言ったんだ、
『当たり前だろ、幽霊なんだから』って！」

なるほど。幽霊だったから痛みを感じない、か。ありえない話じやない。でも、それだと気になる事がまだある。

「でもさ、私痛みは感じないんだけど、物を触ったりする事は普通にできるよ？」

「僕も同じ事を父さんに言ったんだけど……。それに関しては『幽霊と言っても色々な種類があるから、そう言う事もあるんだろう』だって。いい加減だなと思ったけど、相手は幽霊というもつとわけのわからない存在だったから納得できたよ」

「そう……」

やっぱり私は幽霊なんだ。でも一体なぜ？

昴君の話だと今まで幽霊を見た事がなかったという事になる。こんなお寺に育っているんだから、

幽霊というものが頻繁に現れるのであれば決めてめずらしいものじゃないはずだ。しかしそうではないという事は、私の様な幽霊が現れるのはめつたにないという事。では何故私は幽霊として今ここに存在しているのか？

生きていた時の記憶はおろか、名前しか覚えていなかった私にはまったく見当もつかなかった。

私になぜ今ここにこうしているのか、それを訊こうと口を開きかけたその時、

「じゃあ僕は部屋に戻るよ」

と、昴君は木の箱を抱えて立ちあがった。

「あ……」

そういえばその木箱は何？ 頭の中は一瞬でその木箱の事で埋め尽くされてしまった。

「昴君、それ……」

木箱を指差すと、昴君はこれ？、と木箱を持ち上げて首をかしげた。

「これは救急箱だよ。さつきは不審者だと思ってたから手加減を一切してなかったしね。怪我をしていないかと思ったんだけど……。まあ、その心配は一切なかったけどね」

昴君は今までの仏頂面とは違い、フワリと微笑むと「おやすみ」と言って部屋を出ていった。

変化

私が現世に幽霊として舞い戻ってから一カ月が過ぎた。厳しかった残暑もようやく和らぎ、少しずつ秋を感じられる日も増えた気がする。

だけど、私個人はこれといった変化もなく、ただただ私はお寺のお手伝いなどをして過ごっただけだった。

朝は怜治さんと昴君を朝食の用意の合間に起こし、さらに昴君のお弁当を作る。お昼には怜治さんの分の昼食を用意し、その後は怜治さんと一緒に境内の掃除。それが終われば、私は少し休憩をする。ちなみにその間、怜治さんは洗濯をしている。「私がやりましようか？」と尋ねたが、やんわりと断られた。最初はまだ何かしら疑われているのかと思っただけで、よくよく考えてみると洗濯物には下着とかもあるわけで、私がそれを洗って、ましてや干すとなるとやっぱり気まずい。きっと怜治さんはそれを察してくれたんだろう。休憩を終えると、夕食の用意を始める。そして大体このころに昴君が帰宅。夕食の支度が終わったら、二人を呼びに言って夕食をとる。これが私の生活。

しかしそれは突然変化を迎えた。

「え……？ 学校ですか？」

怜治さんの言葉に私は箸でつまんでいたご飯を落っことした。幸い、下にお茶碗があったためテーブルを汚さなくて済んだけど。

「そう、学校。いくら詩織さんが幽霊だといっても、もう一か月もこうして普通に生活しているわけだし、いつ成仏できるかも、何もわからない。だったら学校に行ってみるのもいいと思ってね」

怜治さんの言葉は頭の中でぐるぐると響いているけれど、あまりにも突然のことで思考が追いつかない。

「そっいえば、詩織は一体歳はいくつなの？」

昴君は今日の夕食の唐揚げを箸でつまんだまま、視線だけを私に

向ける。

「あ、あれ……」

私はまたもや言葉に詰まった。

「まあ、覚えてないなら別にかまわないけど」

そのまま視線を唐揚げに戻し、パクリと口に入れた。

「詩織さんは大体……十代半ばくらいかな。ただ、幽霊の見た目は当てにはならないけど……。もし、詩織さんが学校に行くなら昴と同じところにするつもりだよ」

だから何も心配することはない、と怜治さんは続けた。

通学路

それから二週間が過ぎた朝、今日は珍しく朝食を作っていない。今日から昴君と同じ高校に通うことになったので、朝食は怜治さんが作ってくれているのだ。

制服に着替えて鏡の前に立ち、クルリと一回まわってみる。制服は特にダサいわけでも、可愛いわけでもない。けれど、念入りにチェックした。いつまで居られるかわからないけど、第一印象は良く見せたい。

昴君と怜治さんと共に朝食をすまし、家を出ると冷たい風が頬を撫でた。流石にもう十一月だ。いつの間にか、洋服を二枚三枚着るのが当たり前になっていた。

真新しい制服のせいか、目に入る物全てが新鮮に感じて、ついっ
いよそ見をしてしまう。

「ねえ」

前を歩いていた昴君が振り返って声を掛けてきた。昴君の方を見ようと顔を上げると、目の前にあった電柱に思いきりぶつかってしまった。

「危ないよ、って言おうとしたんだけど……遅かったね」

「……っ！先に言っつてよ！」

私はぶつけた額を押さえ、少しだけ恨めしい調子で言った。

「よそ見してた君を置いていかなかったただけありがたいと思いなよ。それに君はどうせ痛みを感じないし、怪我もしないんだから別に問題ないでしょ」

確かに昴君の言っている事は間違っではない。間違っではないないけど、他に言い方っつてものがあると思う。

昴君の言葉は　お前はこれの世に居るべき人間じゃない、と突き付けているようで　私の心をチクリと刺した。

「何ボケッとしてんの？　通学路分らないんだから、ちゃんと

ついて来ないと迷子になるよ」

昂君の棘のある言葉に我に返る。昂君の嫌みにもだいぶ慣れてはきた。しかしこんな性格の昂君、友達は居るんだろうか？

怜治さんは昂君と一緒にだから心配はないと言っていたけど、逆に心配になって来た。

初登校

学校はいたって普通の公立高校だった。

昴君に連れられて職員室に行くと、恰幅の良い中年の先生が出迎えてくれた。

「初めまして。西園寺さんの担任になる、横島純です。これからよろしく願いますね」

差し出された肉厚な手を握り返しつつ思った。

西園寺……？ 私の苗字って『西園寺』だったわけ？ いやいや。たしか『岡本』だったはず……。

「西園寺詩織さん……？ どうかしましたか？」

「あ、いえ！」

私は慌てて握りっぱなしだった手を離した。

「はっはっは。そう緊張しなくても大丈夫ですよ」

『そうじゃありません』

なんて言えるわけもなく、同じようにはっはっは、と一緒に笑っておいた。

「じゃあ、西園寺さんは諸手続きがあるからちよつと待つて下さいね。もしかしたら、HRに少し遅れてしまつかもしれないので、

先に教室に言うておいてください、西園寺君」

「分かりました」

そう言うて、スタスタと歩き出した昴君。

「え……」

今、先生は西園寺君って言った。けれど歩き出したのは昴君。

あれ？ もしかして、と思いつくのはお寺の名前。そう言えば、お寺の前の大きな石に『西園寺』って刻まれていたような気がする。でも一体どうして、私まで西園寺の姓を名乗ることになっているのだろうか？

横島先生についてい職員室の中を歩くと、四方八方から視線を感

じる。おそらくは季節外れの転校生が珍しいのだろう。

居心地の悪さを感じながらも、横島先生の机のところへとたどり着いた。

自己紹介

書類にいくつか署名をした後、私は横島先生とともに教室の前まで来た。そう、前まで。

横島先生曰く、一緒に入るよりも後から入った方が盛り上がる、らしい。だから呼ばれるまで私は、廊下で、教室内の話を聞くでもなく聞かないでもなく待っていた。

「今日からこのクラスの仲間が一人増えます」

教室の中から聞こえてくる唸るような野太い声。もちろん横島先生のものだ。

しかしまあ、高校二年生にもなってその紹介の仕方か。小学生じやあるまいし。

私は廊下の前でフツと笑った。

「それじゃあ、入って来て下さい」

ガラガラと音を立てて扉を開くと、クラス中の目が一齐に私に向く。一気に体がこわばった。

緊張を悟られないよう、自己紹介の前にこっそりと深呼吸をした。

「は……、初めまして。西園寺詩織です」

ザワツと、教室内の空気が変化した。

直前まで私に向いていた目、好奇心に溢れたものも、そうでなかったものも、その全てが一樣に同じ方向に向いた。

窓際の後ろから二番目の席へ、と。そこにはよく見慣れた姿があった。絡まることを知らないサラリとした黒髪、涼しげな目元。単体で見ても美しいと思っただけはいたが、教室という比べる相手が何人もいる中で見ると一層その美しさを際立たせていた。

「昴君？」

同じクラスだったのか。

一言言ってくれればいいものを。そうすればもう少し緊張せずに済んだかもしれないのに。緊張しすぎて、今の今まで昴君に気がつ

かなかつた私も私だけどさ。

しかしそれにしても、同じ名字だとは言つてもそんなに驚くこと
だろうか？

「はいはい、静かに」

と、先生は手を叩きながら言った。

その先生の言葉を合図に一齐に私語を止めた生徒達。

「学校生活で分からない事があつたら、西園寺君に訊いて下さいね。
じゃあ、西園寺さん」

そこまで言つた後、たつぷたぶの二重顎に手を添えて首をかしげ
た。

「うーん、詩織さんの方が良いでしょうか？このクラスには同じ名
字の西園寺昂君が居ますしね」

そうしましょう、と自己完結してしまつた横島先生。

「さあ、詩織さん。あそこが貴女の席です」

指差す先は、窓側の一番後ろ。すなわち昂君の真後ろの席だった。

風

風で髪の毛が右へ左へと流される。絡まる自分の髪を見ながら、昂君の髪の毛を思い出して恨めしく思った。

うざったさから逃れるように、顔ごと澄んだ空を見上げた。空色。透き通る青を見つめ、先程までの教室での事を振り返る。

授業の合間合間の休み時間に質問の嵐だった。転校生なのだから少しは仕方がないと思えるけれど、あれは異常だった。

最初に訊かれたのは、私と昂君の関係。偶然だと言い張ることもできなくもなかったけれど、昂君がクラスの連中に遠い親戚だと言いつつ。その拍子に私が西園寺に居候してる事も知れ渡ってしまった。それがその後の質問攻めを酷くした原因だ。

ほとんどの人間が『昂君は家ではどんな格好をしてる』だの『苦手な食べ物はある』だのと、昂君に関する質問ばかりだ。それも女の子ばかりではなく、男の子からも多かった。

どうしてそんなに昂君のことばかり訊くのかと、逆に訊き返したら、

「あ、別に詩織ちゃんに興味がないわけじゃないの。ただ、昂君ってあまりにも完璧すぎるから、家ではどうなんだろうと思って……」
と、一人の女の子が言った。言い方から察するに、私が自分への質問じゃない事に拗ねてると感じたらしい。それもなかったわけじゃないが、それよりも純粹に昂君という人間がどんな人なのか気になった。

結果、なんと昂君はこの高校の生徒会長だと言うのだ。成績優秀で運動神経も抜群。さらにはあの容姿だ。完璧な人間ってというのは居る所には居るんだと、つくづく思った。

本人は生徒会の用事だとかで昼休みになると、早々に教室を出て行ってしまった。残された私は、ついに質問攻めに耐えきれなくなり、トイレに行く嘘について教室を抜けた。

屋上が立ち入り禁止じゃないのが幸いだった。人気のない方へ人気がない方へと、進んできたら自然と屋上への階段を見つけた。特に施錠もしていないあたり、立ち入り禁止ではないのだろう。風を全身に感じながら私は、んーっと伸びをした。

遭遇

「おい」

誰もいないと思っていた屋上で、背後から声が掛かった。それも、とても不機嫌そうな。

ビクンと肩を震わせて反射的に振り向くと、そこには燃えるように真っ赤な髪の毛の男の子が私を睨みつけていた。

一目でわかる。この人、不良。制服を大幅に着崩し、手には火のついたタバコ。わりと細めの指にはゴテゴテした指輪がはまっている。

「てめえ、一体誰の許可取ってここに入った？」

私を貫くような眼差しに、心臓はドキドキと大きく脈を打ち始めた。

今にも殴りかかれそうなこの状況。なのに、不思議と恐怖はなかった。それどころか、なんだか懐かしい感覚。魔法にでも掛かってしまったかのように、彼から目を逸らせない。

「ポケツとしてんな！ てめえ、人の……な、し……」

今の今まで不良オーラ全開で、眉間にしわを寄せていたのに、私の胸倉を掴むなり目を丸くした。ハトが豆鉄砲を食らった顔というのはこういう顔を言うのだろうか。

「詩織……」

彼の口からポツリと私の名前が零れた。はて、一体どうしてこの人は私の名前を知っているんだろう。先程、教室で自己紹介した時にはこんな人はいなかったはずだ。

「お前、なんで……」

胸倉は乱暴に解放され、代わりに穴が空くほど見つめられる。

背中と顔がカツと熱くなる。

「……って、そんな訳ねえよな」

スツと冷めた目つきになると、私を解放した。

踵を返して校内に入っていく彼の後姿がやけにあっさりとしていて、少し寂しくなった。

詩織

赤い髪の彼とは思ったよりもすぐに再会した。

昼休み後のすぐの授業の開始チャイムが鳴った時だった。

ざわめきの中、教室のドアが開いた。数人の生徒が気付いたようで、扉の方を見る。とは言っても生徒達は先生が入って来たと思っ
て見たのだらうけど。

入って来た人物こそが昼休みに屋上で出会った彼だった。

とても目立つ髪色。堂々とした立ち振る舞い。私の目を引くには
十分すぎた。

スタスタと近くまで歩いてきたと思ったら、なんと、彼は私の隣
の席にいた。その席は朝から空いている席だった。

当たり前だが、こんなに目立つ彼が隣に居て気付かないわけがな
い。

「……うちのクラスだったんだな」

「はい。今日、転校してきて……。貴方こそ同じクラスだったんで
すね」

「そつみたいだな。そついやお前、名前は？」

「え？」

おかしい。さっき彼は私の名前を言っていたはずなのに。

ともあれ正式に自己紹介をした覚えはない。何かの勘違いだった
のかと思ひ直し、

「……西園寺、詩織です」

と小さな声で言った。

とりあえず、今日この学校で自己紹介した時の名前を名乗る。す
ると、彼は屋上で見た時と同じ表情になった。

「詩織……？ 嘘だろ……」

嘘とは失礼な。しかし、そんな軽口をたたく気にはなれない。

切なくそうで、寂しそうで、悲しそうな、穏やかな負の感情をな

い交ぜにしたような彼の顔を見ていられなくなって、思わず抱きしめたくなった。

しかし、教室。

やっとの事でその衝動を抑えて、軽く肩をポンツポンツと叩いた。私の行動に少し驚いたらしく、ピクツと小さく肩を震わした。

「どうかした？」

「い、いや、何でもない。知り合いと同じ名前だったからびっくりしただけだ」

「詩織って名前の人は結構いると思いますけど？」

「……それだけなら、な」

彼は無理に笑った。

きつと私が心配そうに見ていたせいだろう。

「そいつ、顔もお前にそっくりなんだ」

西森隼人

夕食を終えた後、部屋に戻った私は教科書を床に並べた。真新しいそれらは光に照らされて、キラキラとしている。

高校といえは、すでに義務教育は終了している。教科書代だってばかにならないはず。なのに、怜治さんは何も言わずに買ってくれた。

怜治さんの懐の深さに感動している時、コンコンコンツとドアが鳴った。

「ねえ、詩織」

戸をあけて入って来たのは、怜治さんの息子の昴君。恩人である怜治さんの息子だから、返事を待たずに戸をあけた事を注意する事も出来やしない。着替えてでもいたらどうするんだ。漫画やアニメでお約束の展開にする気か？ などといたい事はいくつかあったがをそれをすべて飲み込んで、

「何？」

とだけ言った。

「今日、西森隼人と話してたでしょ」

彼の口から出た名前は、あの赤い髪の彼のものだった。

「うん。話したけど」

あの後二言三言は言葉を交わしたけれど、他のクラスメイトに比べたらそれほど話していないような気がする。

「悪い事は言わないから、あいつとは関わらない方が良い」

「……うーん」

あえて『なんで』とは言わない。西森君の風貌を見れば、積極的にかかわるべきでない人間である事は一目瞭然なのだから。

「なにその返事。関わらないって誓いなよ」

「誓いなよ、ってそんな無茶な」

昴君には悪いけど、関わらないなんて言えない。

確かに見た目は怖いけど、あんな悲しそうな表情見ちゃったら、
なんとかしてあげたいと思ってしまふ。

「もし、あいつに関わるんだったら覚悟しなよ？」

「なんの覚悟？」

「死ぬ覚悟だよ」

謎の声

フワフワと体が浮くような奇妙な感覚。普段感じた事のない感覚に戸惑った。

「おや？ 貴女は誰ですか？」

「誰？」

耳から聞いているものじゃない、頭の中に直接響いてくる声。

「おかしいですねえ。僕は昴君の夢とつないだつもりだったんですけど」

夢とつなく？ 一体何を言ってるんだ、この人は！ いや、それ以前に、相手は人なのか？

「あの！ 誰なんですか、貴方は！」

「貴女こそ誰なんですか？ 昴君の知り合いですか？」

「…… 人にもものを訊く時は自分から名乗るのが礼儀だと思います。めずらしく警戒心が働いた。相手が誰なのか分からない状態で自分の事について喋るのはあまりにも無防備だと思ったので、どうしても相手から話させたかった。

しかし、「じゃあなおさら、貴女から名乗るべきだ」と至極もつともな事を言われてしまった。仕方ない。

「私は西園寺にお世話になっているものです」

幽霊だという事は伏せておいた。まあ、どっちみち信じないだろう。

「ああ、なるほど」

と、何かを思いついたように彼は言った。

「では、貴女が詩織さんですね」

「……っ！」

いきなり名前を言い当てられて、声（声なのか何なのか実際は分からないけど）も出ない。

「怜治さんから聞いていますよ」

この人は一体、何者なの？ 怜治さんや昴君の名前が出ている事を考えると、そこまで怪しい人間ではないのかもしれないけど。

「どうやら、幽霊だというのは本当の様ですね。思わず引き寄せられてしまいました。 実に興味深い」

謎の声はクククツと声を漏らした。顔は見えないし、何考えてるのかわからない。それが余計に私の不信感をあおる。

「直接会った方がよさそうだ。近いうちに会いに行きます」

頭に響いていた声が一気に遠くなる。

「ちょー！」

伸ばした手は妙に重かった。気がついたら、いつも通り布団に横たわっていた。目の前には目標を失った手が見える。きっと昴君が今の様子を見たら、冷めた目で見るだろう。

「夢……？」

そんな馬鹿な。あんなにリアルだったのに。

伸ばしていた腕を風がなでた。

「……ツクシヨン！」

流石に夜は冷える。私は急いで腕を引っ込めて、寝返りを打った。

迷子

十二月に入ると、ちらほらとクリスマスを感じさせるイルミネーションが飾られ始めた。

「つたく！ 昴君ってどこ行っちゃったんだろ……」

今日は珍しく というか初めて 昴君と一緒に買い物に来ていた。しかし、この人込み。昴君とはぐれるまで、そう時間はかからなかった。

かれこれ三十分も、この寒空の下で昴君の姿を探しているがいつこうに見当たらない。そろそろ指先も冷たくなってきた。

先に帰ってしまったのだろうか？ 私も帰ってた方が良さだろうか？でも、昴君も私を探していたとしたら？ 絶対に後から文句を言われる。

心の中で溜息をつきながら、もう一周その辺を見て回ろうかと歩き出した。

「ねえねえ、西園寺さん……だよね？」

目の前の男の子が、私の行く手を阻むようにして立ちふさがった。顔を上げると、そこには見た事がある様な気がしなくてもない人がいた。

「西園寺さんだよね？」

……ああ。私のことか。教室では、昴君との差別化のために、『詩織』と呼ばれる事が多かったため『西園寺さん』だなんて呼ばれてもピンとこなかった。

「……」

「……」

互に見つめたまま沈黙。

だめだ！ 思い出せない。私のことを知っているとこの事は、きっと学校の生徒だ。思い出せなくて、ごめん！

「あ、ごめん。西園寺さんは俺のこと知らないよね？」

困った様に眉を下げて笑った。

「すみません」

「いって、いって！普通の生徒同士ってそんなもんだよ。西園寺さんは転校生だったし、あの昴の親戚だって言うから、ものすごく校内で有名になったけどね」

その一言で熱が一気に顔に集まった。私ってばそんなに名前が知れ渡ってたの？しかも昴君の親戚としてだなんて、すごく嫌だ。あんな、間違っただけで三次元に出てきてしまった様な二次元の妖精さんと親戚だなんて、私は一体どれだけがっかりされるのさ。

「それよりさ、昴があっちで待ってたぜ」

彼は踵を返すと同時に私の手を取って歩き出した。

「あ、ありがとうございます！」

とりあえず、これでようやく昴君と合流できる。

私は手を振り払わなかった。人の親切心を無下にできないから繋いだままにしておいただけで、決して寒いからじゃない。

知らない人について行ってはいけません

「ここだよ」

誘導というか、無理矢理手を轢かれてというか、ともかく連れて来られた場所は商店街から少し離れた廃ビルだった。

「あの……」

さすがにおかしい。こんな、いつ崩れるかも判らないような建物に昴君が居るわけがない。

「連れて来たぞ」

ただっ広い部屋には数人の高校生。ニタリと笑うその顔を見た時、ようやく自分の置かれた状況を理解した。

理解すると同時に、血がすごい勢いで全身を駆け巡る。手足が震えて言うことをきかない。寒さのせいじゃない事ははっきりと分かる。

その場に崩れ落ちると、そのまま自分の体を抱え込んだ。

「っんだよ、震えてんのか？」

ポンツと軽く肩に乗せられた手を私は振り払った。まるでその手が、毒をもつくモヤサソリであるかのように大げさに。

「何だよ全く。別に何もしねえって！」

「嘘だ！」

嘘だ、嘘だ、嘘だ、と私は連呼した。こんな誰も来ないような場所に連れ込んでおいて何もしい訳ない。逃げ出したくて、必死になつて足に力を込めるが、まったく言うことをきかない。

「待て！ こっちへ来い」

逃げられるわけもなく、私はあっさりと捕まった。そのまま、ものを扱うかのように乱暴に奥へと投げられる。周りには私とは比べものにならない位がたいのいい男たち。

逃げられない。

その非情な現実をつきつけられて、私は声も出なかった。

「大丈夫？ 西園寺さん」

一人の男が顔を覗き込みながら訊いた。よく見ると、見覚えがある。私服だから最初は分からなかったけど、この人達、うちの学校の不良グループの人達だ……！

「安心してよ。本当に西園寺さんには手を出すつもりはないんだ」「そうそう、俺らの目的は昴だけだからさ」

ここまで聞いてようやく合点がいった。昴君の性格を考えると、相手が不良だからってものおじするとは思えない。きっと校則違反を注意したとかで理不尽な恨みでもかっってしまったのだろう。

脱出計画

なんとか落ち着きを取り戻したものの、人質という立場が発覚しただけで、何の解決もしていない。

「ねえ」

と、一言。

数人の視線が私に集まった。

「昴君は、私がここに居ることを知ってるの？」

「ああ。今、昴を呼びに行ってるるところだ」

……もしも、昴君が来なかつたらどうしよう。この人達は私に何もせずに返してくれるだろうか？

考えれば考えるほど、思考がどつぼにはまってく。逃げる方法を考えなきゃ。

幸い、皆気を抜いているらしく、ここから走り抜けるのはたやすいだろう。問題は扉。あの重い扉は私の力でも開かないこともないと思うが、時間がかかる。きつとその間に捕まってしまう。そしてらきつとチャンスはもう二度とない。

一番高い確率で成功する方法は、昴君が入ってくると同時に私が逃げ出すこと。これなら、私も助かるし、昴君も余計なケン力をせずに済む。ただしこの作戦は昴君が来ることが前提で昴君が来なければ話にならない。

いや、待つて。さっき、昴君を呼びに行ってる、と言っていた。

つまり誰かしらあそこの扉を開けて入ってくるわけだ。一人ならばなんとかなるかもしれない。二人以上だったらその時はその時だ。

とにかく、何もしないよりはマシだ。扉が開き始めたら、全力でダッシュ。その後は体当たりでもかまして、商店街まで走ればいい。

脱出計画(後書き)

短くてすみません！

予想外

息をひそめていると、他愛のない物音にすらも敏感に反応してしまふ。

扉が開き始めるといふ、そのタイミングが大事。早すぎれば、扉が開ききらないだろうし遅ければ、扉を開けた奴らの仲間に待ち構えられてしまふ。

ガシャンと、扉が震えた。

今だ！

私が地を蹴り、走り出すと、それから一瞬遅れて声上がる。

「お、おい！ 待て！」

そんな声を気にして待つわけがない。私は開いていく扉に突っ込んで行つた。

しかし

「あー！」

一歩遅かつた。目の前にはすでに人が立ち塞がってしまっていた。顔を見ると、まさかの人物。そんな、どうして

「……西森君」

見間違えるわけもない、赤い髪。哀しさを含んだ、グレーの瞳。

「どうして……！」

昴君は関わるなつて言ったけど、『絶対良い人だ』って、根拠はないけど信じてたのに。

逃げられないとか、昴君はどうしたとか、そんな事はどうでもよくて、ただただ目の前の事実が受け入れられない！ 受け入れたくない！

「西園寺……」

私の顔を見ると、西森君は微かに笑っていた。

「隼人さん！」

西森君が何かを言おうとしたが、後ろから駆け寄ってきた不良達

によって遮られてしまった。

「隼人さん、どうしてここに？」

「ああ、実はな」

『どうしてここに』確かにそう聞こえた。

その言葉にすごく、すごく安心した。仲間であるならそんな事を言うはずがない。西森君はこの人達の仲間じゃない。

「そこでこいつらに会ってな」

西森君の視線が指したのは、倉庫の外。何かあるのか、と私達は視線を追った。

「すみません……」

申し訳なさそうに頭を下げて現れたのはあまり見覚えのない人。

たぶん不良仲間の人だろう。

「実は昴に話してたところを、隼人さんに見つかってしまいました

……」

「話聞いたら、人質とってるって白状してな。ったく、てめえら何やってんだよ？」

眼光がひと際鋭くなると同時に、声のトーンが下がる。その憤りが私に向けられているものでないのは判っているのだが、背筋に冷たいものが走るのを感じた。

西園寺昴と西森隼人

「俺がそういうやり口が嫌いなの、忘れたわけじゃないよな？」

と、西森君は唸るような声で言った。

「す、すみませんでした！」

一人が声を震わせながら頭を下げると、それに続けとばかりに謝る不良達。

「……二度と忘れるなよ」

許しを得た彼らは後ずさりながら、ありがとうございます、と叫んだ。西森君の怒りにそれ以上耐えられなかったのだろう。早々に倉庫から飛び出していった。

「悪かったな西園寺」

不良達の姿が完全に見えなくなった後、西森君はポツリと言った。

「……なんで、西森君が謝るの？」

「それは」

「それはこいつがあいつらと同類の生き物だからだよ」

西森君の声にいきなり声がかぶさった。その声にはよく聞き覚えがあったし、この状況から、誰だか見当も付いた。

「昴君？」

私は倉庫の外にひよこつと顔を出すと、壁にもたれかかっている昴君を見つけた。足元には不釣り合いな買物袋が無造作に置かれている。

「言ったでしょ。西森隼人はろくな奴じゃないって」

と、ため息混じりに言い放った。

「おい」

先程ほどと同じ、とまではいかないが低いトーンで昴君に呼びかける。

「何言ってるんだ。今回はてめえが要因で起きたことだろうが」

「でも彼らは君の仲間だろう？ 君も同罪だよ」

「元はといえば、お前の横暴な取り締まり方が奴らの反感を買ったんじゃないか」

「生徒会役員が校則違反者にそれ相応の処罰を下すのは当然のことだよ」

「やり方つてもんがあんだろうが！」

「言つても聞かないから、実力行使に出ただけだよ」

「ちよつとちよつと、二人とも！」

終わりの見えない言い合いに、仕方なしに割って入る。

「もういいじゃない。結果的には西森君のおかげで誰も被害を受けなかったんだから、ね」

「別に。こいつがいなくても、僕一人でもどうとでもできたさ」

いつまでも意地を張る昴君。いや……もしかしたら本当に、昴君一人でも解決できたのかもしれない。不良が何人も集まっていながら、私を人質にしたのがその証拠だ。

「そりゃあお前一人なら何とかなつたかもしれないけどな」

「今回は詩織が居た。だから僕が抵抗できない。とでも言いたいのか？」

「事実だろ」

「馬鹿馬鹿しいな。僕は誰が人質に取られていようと、それに屈するよつな人間じゃない」

と、昴君は鼻で笑いながら言った。

昴君は日頃から厳しい人だけど、まさかここまで冷たい人とは思わなかった。

「……ツチ！ もういい。お前の考えはよく分かった」

西森君はクシャツと髪をかき上げると、視線を昴君から外した。

「とにかく……無事で良かったな」

西森君は、見る人に畏怖を抱かせる風貌に似つかわしくない柔らかい微笑みを浮かべていた。

「あ、ありがとう！」

よく考えたら西森君が来てくれなかったら最悪の状態になってい

たかもしれない。私はもう一度、本当にありがとうと、言った。
すると西森君は少し悲しそうな顔をした。

置いてかないで

妙ないざこざに巻き込まれてしまった結果、すっかり日が傾いてしまった。

西森君とはあの倉庫の所で別れ、私と昴君は商店街で買い物を買った。時間は予定よりも大幅に短くなってしまったけれど、メモしていた物は一通り買いそろえる事が出来た。

そつと横目で昴君を見た。その両手には重そうな買い物袋が握られている。重い方の買い物袋は昴君が持つてくれている。私が押し付けた訳でも、昴君がわざとらしく持ち始めた訳でもない。気が付いたら昴君が持つていた、という感じだ。こういうさりげない優しさを持ち合わせている昴君がさっきの様な非情な考え方をするなんて信じられない。

「全く、」

昴君は視線を前に向けたまま口を開いた。私はハツとして視線を昴君の顔へと上げる。

「詩織は僕が思っていた以上に頭が弱かったみたいだ」

「な………！」

唐突に罵られて、私は思わず声を上げた。立ち止まり、まじまじと昴君を見上げる。昴君も立ち止まり、私の顔を見下ろした。

「なんであんなよく知らない奴についていったのさ」

そう言った昴君はピリピリとした空気を纏っていて、とても強くは出られない。

「だって、昴君が待つてるって聞いて………」

ああ、ダメだ。どうしても最後までではっきりと発言できない。

「なにそれ。そんな誘いについていくなんで、三歳児よりも危機感が足りないね」

「そんな言い方………！」

「本当のことでしょ」と、昴君は淡々と続ける。

「はぐれたからって知らない人間についていくなんで、どういう神経してんのさ」

「知らない人じゃなかったもん。同じ学校の人だったもん」
口を尖らせつつ反抗するが、昴君には全く気にしていないみたいだ。

「じゃあ君は日本人だったら皆、良い人だとも言うの？ 私は犯罪者じゃないから、同じ日本人なら皆犯罪者じゃない、って」

「そんな事は言わないけど……」
「それと一緒に。いくら同じ学校の人間だって簡単に信用するなんて、短絡的すぎる」

昴君はそこまで言い終わると、止めていた足を動かし始めた。
「待って」

言われたことと、置いていかれそうになった事で、鼻の奥がツンとし始めていた。わがままを言っつて、親においていく振りをされている子供の様な気分。待っつて、行かないで、と必死で昴君の後を追った。

影

半泣きで後を追うが、昴君は振り向く事はおろか立ち止まってさえくれない。こうまで冷たくされると、家まで付いて行って良いのかさえも不安になる。家まで付いて行って、そこで拒絶されたら、家に入るなど言われたらどうしよう。

強い拒絶を恐れてついに私は昴君を追う足を止めた。それに気付いているのかいないのか、昴君はペースを変えることなく歩き続けている。遠のく背中を見送りながら、胸に孤独感を抱いた。

結局置いて行かれる形になり、私は近くの公園のベンチに腰を下ろした。

「どうかしたんですか？」

西日を遮る影。見上げるとそこには男の人が立っていた。

「いえ、何でもありません」

涙を見られまいと、慌てて下を向く。

「でも、泣いてるじゃないですか」

と、言っつてハンカチを目の前に差し出された。

私は戸惑っつていしまい、ついつい顔を上げて彼を見た。

「ほら、やっぱり泣いてた」

零れ落ちていく涙を拭われて私は目を丸くした。

「おや、泣きやんだ」

からかうような口調なのに何故だか嫌な気分にはならない。

「すみません……」

恥ずかしさと、情けなさで私はまた下を向いた。

僕の胸をお貸しします

「何かあったんですか？」

数分の後、私の横に腰を下ろした彼はポツリと言った。

「いいえ……」

何があつたかなんて初対面の人間に語る事じゃない。それに私が幽霊だということもある。

簡単に話せる話じゃないので、私は追及を覚悟しながらも軽く否定するだけにとどめた。しかし私の予想に反して、彼は

「そうですね」

とだけ言った。

「僕、今日は親戚の家に遊びに行く途中だったんですよ」

「はあ……」

彼は唐突に自分のことを語り出した。

「その途中で貴女を見つけました。このベンチで一人で座っている貴女は今にも消えてしまいそうに儂く見えて、放っておけなかった」

薄く笑うその姿に、何故か昴君の笑顔が重なった。その笑顔が、短いけれど濃い昴君との思い出をフラッシュバックさせた。

ジワリと目と鼻が熱くなるのを感じた。だめだと思っても目に涙がたまるのを止められない。

「なッ！　なんでこのタイミングで泣くんですか！」

まるで僕が泣かしているみたいじゃないですか、と言う彼の声は耳に入ってはくるものの涙を堪える事はできない。

「す……」

声が濁る。

「すみません……」

次々に溢れては流れる涙は枯れることを知らないらしい。

「ああ、もう！」

声が聞こえたと同時にだった。私は見ず知らずの彼の腕の中に居た。

「僕の胸を貸しますから、とつと泣ききって下さい」

人の体温とはなんと安心するものだろう。

相手は友達でも恋人でも家族でもない。本来安心する要素は何もないはずなのに、不覚にもそのぬくもりを求めてしまった。

一緒に行く

見上げると月が煌々と輝いていた。

「きれい」

「ええ、そうですね」

こんな寒空の下、こんな時間になるまで、落ち込んでる私に付き合ってくれた。

けれど。私は腕時計に目をやった。そろそろ九時をまわる。

「あの……」

「なんですか？」

「大丈夫なんですか？」

私の視線が腕時計にあるのに気付くと、彼はゆったりとした動作で立ち上がった。

「確かにそろそろ行かなければなりませんね」

「そうですね」

私はなるべく平静を装って言った。

十分すぎるほどなぐさめてもらった。もうこれ以上迷惑はかけられない。

「……貴女は？」

「なんですか？」

今度は私が聞き返す。

「ちゃんと帰れますか？」

「か、帰れますよ！ もちろん！」

明るい声で言ったつもりだった。けれどそれが余計に場の空気にそぐわなくて怪しかったのかもしれない。

「大丈夫です。もう十分泣きましたし、これ以上は涙も出ませんから。だからすぐに帰ります」

「……一緒に来ませんか？」

「え？」

彼は私の話を聞いているのかいないのか、話を続ける。

「今日僕が行く予定の家に、一緒に行きませんか？」

「そんなわけには……」

「大丈夫ですよ。優しい方ですから、それに家も広い。きっと貴女のことでも泊めてくれます」

「でも」

確かに今の私に帰る場所はない。けれど、だからといって他人に厄介になるつもりもない。そんな事になるなら、公園で野宿した方がマシだ。

どうせ幽霊だもん。通り魔が来たとしたって、刺されて死ぬようなこともない。

「もしかして、警戒してるんですか？」

「は……」

「僕がいかかわしい考えで貴女を誘っている、と」

「ち、違います！ そんな事思ってますせん！」

言っている意味が解かって、私は慌てて否定した。

「別に構いませんよ。むしろ、警戒するぐらいじゃないと危険です」

もう一度否定しようと口を開くが、声になる前に彼の言葉に遮られる。

「けれど本当にやましい気持ちはありません。それに」

次の言葉に私は時が止まったかのような感覚に見舞われた。

「それに僕が行く場所は、西園寺というお寺です。そこには住職も居ますし、その息子さんも居る。最近では女の人に部屋を貸しているそうです。危険はないはずですよ」

西園寺。まさか目の前の彼の口から聞くことになるとは思ってもみなかった。

びちびちびちびちびちびち

「まさか、貴女が詩織さんだったとは予想してませんでした」

「私だつてびつくりですよ。まさか、昴君のいところだったなんて」
西園寺いち。それが彼の名前だった。

結局いちさんに連れられて西園寺に戻る事になった私は、隣を歩くいちさんの横顔を見詰めた。

似ている。

背はいちさんの方が高いし、髪も微妙に長い。けれど、切れ長の目や薄く形の良い唇は昴君のそれとそっくりだ。どうして気が付かなかったのか不思議になる位だ。人間がいかに雰囲気だけで相手を認識しているかがわかる。

「穴があきます」

沈黙を破つたのはいちさんだった。

「視線が刺さる様です」

私はハツとして目を逸らした。前を向いていたからまさか気が付かれているなんて思わなかった。

「そんなに僕は良い男ですか？」

「あ、いえ……」

そうじゃなくて、と言いかけて気付く。それは否定する方が失礼じゃないかと。

けれどだからと言って、かつこいいです、と言つのもなんだか気持ち悪い気がする。

うんうん唸っていると、隣でククツとのどを鳴らすような笑い声が聞こえた。

「そんなに悩まないでくださいよ。軽いジョークですから」

「すみません。昴君によく似ていたもので、つい」

「確かに僕らはよく似ていますけど」

いちさんは少しだけ、本当に少しだけ、眉をひそめて言った。

「それは昴君の前では言わない方が良いでしょう。きっと不機嫌になりますから」

「……気を付けます」

昴君といちさんの間に何があったかは分からない。だけど何も聞かない。人には聞かれたくないことの二つや二つあって当たり前だ。「気を使わなくて結構ですよ。別に仲が悪いわけではなく、ただ趣味が合わないだけです。僕の方は昴君のことを嫌いじゃありませんし」

ニツコリと微笑んだその顔は見慣れないものだった。昴君はこんな笑い方はしない。

「ところで……いちさんって、歳はいくつなんですか？」

このままだと、つつこんではいけない話へどんどん突き進んでしまいそうだったため、私は無難な話題を提供した。

「ぴっちぴちの二十一歳です！」

……少しだけ、昴君がいちさんを苦手だという理由が分かった気がした。

大丈夫

私はドアの前で息をのんだ。

「大丈夫ですよ」

いちさんはそう言うが、私は心底不安だった。昴君は私が帰って来たことを、うっとおしく思わないだろうか。元々幽霊の存在を完全否定していて、私のことを快く思っていないはずなのだ。

「……詩織さん。たとえ昴君がなんと言おうと、怜治さんが貴女を追い出そうとするはずありません。あの人はお人好しですから」

「……そうですけど」

「まどろっこしいですね」

いちさんはドアの前に居た私を押しつけて、インターホンを押した。

「ちよつと、いちさん！」

慌てていちさんを遠ざけるが、もう遅い。

家の中で、音が鳴るのが分かった。

「まあまあ、不安なら僕の後ろに居て下さい。最初は僕が話しますから」

いちさんが言い終わらないうちに、トントンと足音が聞こえ始め、数秒の間を置いてドアが開いた。

出て来たのは昴君だった。

「こんばんは、昴君」

「……なんだ、貴方が」

「なんだとは随分と御挨拶ですね」

「何の用？」

「聞いてませんか？ 今日、遊びに行くと言っておいたはずですけど」

「……上がれば」

昴君は簡潔に受け答えすると、踵を返して中に入ろうとした。

「ところで、随分慌てて出て来たようですけど、どうかしたんですか？」

ピクリと昴君の肩が動いた。しかし昴君は背を向けたまま体制を変えなかった。

「貴方には関係ないよ」

とそっけなく言い放った。

いちさんはそれを気にする事もなく、むしろ心なしか楽しそうに、「本当にそうでしょうかね」と言った。

「どういう意味」

「こういう意味です」

私は不意に伸びて来た腕につかまれて、昴君の前へと引っ張り出された。

素直じゃないですね

顔を上げるのが怖かった。また拒絶の言葉を吐かれたら、きっと私はこの場から逃げ出してしまふ。

黙りこくっている私を後押しするかのようにはいちゃんが、ほら、と声を掛ける。私は臆病な自分の心を無理矢理押し込めて呼び掛けた。

「昂君」

「どこ行つてたの？」

私の言葉はいつものように昂君に遮られる。そう。いつものように。

何事もなかったかのような態度に、半分安心した。残りの半分は心配してもらいたかつたという、私のわがままだった。

「あ、えと……公園に……」

「ふうん。こんな時間まで？」

「ご、ごめんなさい」

やっぱり怒っている。怖くて顔を見ることができないから、昂君がどんな表情をしているのかは分からない。けれど、淡々としたいつもと変わらぬ口調の中にいつもとは違う冷めたものを感じるのは私の中の罪悪感のせいだけだろうか？

「昂君も素直じゃないですね」

「何が言いたいなの？」

呆れた、とため息交じりのいちさん。その様子とは対極に、苛立ちを全面に押し出す昂君。

私に話をしていた時よりも、数段不機嫌な声だった。

「素直に心配した、って言えばいいじゃないですか」

「……っ！」

昂君が口ごもるのを感じて、私は顔を上げた。見ると、珍しく顔を赤くした昂君がいた。

「うるさいよ。ほら、詩織も！　いつまでもぼさつと玄関に居ないで、入りなよ」

昴君はクルリと方向転換して、そのまま家の中へと入って行ってしまい、一度も振り向かなかつた。

状況はさつきと似ているのに、全然苦しくない。

私は赤面していた昴君を思い出して頬が緩むのを感じながら、昴君を追った。

尋ねて来たわけ

「実は僕が来た理由は詩織さんに会うためだったんです」

一夜明け、私達（私と昴君といちさんと怜治さん）はテーブルを囲んでくつろいでいた。

穏やかな静寂を破ったのは、何やら荷物整理をしていたいちさんだった。

「私に、ですか……？」

「はい。この前、会いに行くと言ったじゃないですか」

この前この前この前……？

幽霊として舞い戻ってから今日までの記憶をたどるが、全く覚えがない。

「いつの話ですか？」

「ついこの間ですよ。もしかして、覚えてないんですか？」

うーん、と脳みそをしぼり上げるが、成果は上がらなかった。

「ほら、僕が間違えて詩織さんの夢に入っちゃったじゃないですか」

「え？ まさかあの時の」

「ちよつと待ちなよ」

至極当然のこのように、さらりと衝撃の事実を言い放ついちさん。あの夢に出て来たのはいちさんだったのか。そう言えば会いに行くとか言っていたような気もする。

ようやく話が見えて来た。そう思い口を開くが、残念ながらそれは昴君によつてはばかられた。

「なんで詩織の夢に入ったの？ 貴方は知らなかったはずだよね、詩織がここに居るなんてことは」

「あ、それ父さんが話した」と怜治さん。

昴君はいつの間にか読んでいた本を机に置いていた。昴君も怜治さんも聞いていないようで聞いていたのか。

「詩織さんの事を聞こうと昴君の夢に入ろうとしたら間違えちゃいました」

「待て。また僕の夢に入ろうとしてたわけ？」

「いいじゃないですか、便利なんですから」

段々と二人の会話はわき道にそれていき、電話代や交通費、睡眠時間の話になった。

ヤンヤヤンヤと言い合う二人は兄弟の様に見えた。こんなこと言ったら、いちさんはきつと喜ぶだろうけど、昴君は不機嫌になるだろうな。

「それで」

静かな、それでいて存在感のあるテノールが、二人のくだらない口論を打ち止めた。

「いちくんは、詩織さんに何を伝えたくて、ここまで来たのかな？」

いちさんの話

「実は僕、幽霊やテレパシー等の研究をしているんです」

いちさんを含め、私達四人は1つのテーブルを囲むように座り直した。私の横に昴君。向かいにはいちさん、その隣に怜治さん。

「だから、本物の幽霊である詩織に会ってみたかったです！」

紅潮させた頬に手を当て、溜息を吐くその姿は古い映画に出てくる未亡人の様に色っぽかった。それだけに話している内容のマニアックさが残念だ。

「でも、私そんなに普通の人と変わりませんよ……」

「何を言うんですか！」

想像だにしなかった大声に、私はビクツツと身を震わせた。隣で昴君も耳を塞いでいる。

「痛みを感じない、血も出ない。そのどこが普通の人間ですか！」
「うるさいよ。少し落ち着いたら？」

いちさんは椅子に座り直すと、自らの熱を放出するかのようにつくりと息を吐いた。

「すみません、興奮して取り乱してしまいました。幽霊について僕が知る限りの事を話しましょう。まず、詩織さんがそうであるように、痛みを感じなかったり、怪我をしないということは幽霊にはよくあることです」

真剣な眼差しを向けられ、私は一瞬呼吸をするのを忘れた。昴君も怜治さんも、

真面目ないちさんの説明を黙って聞いている。時計のアナログ音がやけに大きく感じる。

「しかし、幽霊でも怪我をしたりすることもあります。それは幽霊として最も避けなければならぬ、恐ろしいことが原因です。

そう言えば」

いちさんは目の前にあるコーヒーマグの入った器に視線を落とす。

「なんですか？」

「詩織さんはどうして自分がこの世に戻って来て、こうして一人の人間であるかのように生活しているのか、考えた事がありますか？」

「え」

考えたこともなかった。自分が今ここに居る理由。

私の思考に予想が付いたらしいいちはさんは、お得意のククツとを鳴らす笑い方で笑った。

タイムリミット

「そんなに難しく考える事はありませんよ。よく言うでしょう、無残な殺され方をした人が幽霊となって写真に写りこんだりする、と。つまり、貴女がこの世に戻って来た理由は未練があったから、という訳です」

よほど現世に強い思い入れがあったのでしよう、といちはさんは最後に付け足した。

未練。今の私にはそれが何だか分からない。生きていた頃の事が何も思い出せない。

「そんなに焦って考えなくても良いんじゃない」

昴君は飲んでいたコーヒートをカタン置いた後、静かに言った。

「成仏できなければうちに居れば良いだけの話だし。ね、父さん」

「……いいえ」

昴君の言葉に答えたのは、怜治さんではなくていちはさんだった。

「早めに未練がなんなのかを調べ、早々に成仏するべきです」

「どうということ？」

いちはさんのただならぬ雰囲気に、昴君も自然といつもよりも目つきがきつくなる。

「幽霊として存在していられる時間には限界があるんです。もちろん個人差はありますが、そう悠長に構えてはくれませんよ」

「……なんだ、問題ないじゃないか」

拍子抜けした、とでも言いたいかの様に、昴君は肩の力を抜いた。「どうしてそう思うんですか？」

「幽霊としての時間に限りがあるという事は、何もしなくても必然的に成仏できる。そういうことじゃないの？」

その言葉を聞いたいちはさんは、頭を抱えて、ハハハツと乾いた笑いをもらった。その後昴君を見下す様に、大げさに息を吐いた。

永遠の孤独

「昂君、君はもつと幽霊について勉強するべきです。いいですか、幽霊が消えることには二通りあります。まず一つ目、めでたく未練を晴らし、この世に一部の気持ちも残さないで成仏すること。」

昂君はいちさんに抗議の声を上げようとしたが、いちさんがそれをさせないよう、目で制した。

私が二つ目は？ と促すと、いちさんは軽くうなずいて再び口を開いた。

「二つ目は、この世に思いを残したまま、魂だけがこの世に残る、というものです」

「成仏とどこが違うのさ」

「全然違います。魂のみがずっとこの世に留まるという事は、未来永劫転生することもなく、決して叶うことのない望みを抱き続けるということですよ」

「どういうことか分かりますか？ と、付け足されたが正直ピンとこない。私がフルフルと首を振ると、いちさんは説明を続ける。

「魂だけがこの世に残るといふ事は、誰にも気付かれることも、話す事も出来ず、ただただ人間の生きる様子を見ているだけということですよ。簡単に言えば、クラスで苛められていて、話し掛けても誰も答えてくれないというようなものです」

「それって……!!」

「ええ。すごく恐ろしいことです。人間と言うのは他人が居てはじめて、自分という存在を認識できるものですからね。誰にも見てもられないとなると、存在そのものがないように感じるでしょう」

体の温度が引いて行くような感覚にとらわれた。

私には見えているのに、相手には見えていない。無視とかいうレベルではなく、本気で私の存在に気付かないということ。なんと

う孤独。

「も、もし」

私はのどのつかえを無理矢理押しやり、口を開いた。

「もしそんな状態になったとして、それはいつまで続くの？」

「いつまでも、です」

そう言った後、いちさんの口は意地悪く弧を描いた。

私は初めて自分の置かれた状況に恐怖した。

横島先生のばかり！！

「ああ、もう！」

目の前にある書類の山に、私の苛立ちはピークを迎え、ヒステリックな声を上げた。

窓の外はとつくに濃紺に彩られてしまっているというのに、なんで私が教室でこんな作業を続けなければならぬんだ。

「そうばやくなよ。正規の日直じゃない俺も手伝ってたからよ」
西森君に言われて、私はしぶしぶ作業を再開した。

事の始まりは、帰りのホームルームが終わり「さて帰ろう」と鞆を持った時だった。横島先生が書類の束を抱えて教室に戻って来て、「よかった。詩織さん、まだ帰ってなくて」

と、とても良い笑顔で言った。

書類の量を目の当たりにした私は、すこぶる嫌な予感が頭をよぎった。

「この書類、まとめておいて下さい」
予感的中。

だめ押しとばかりに、「日直の仕事だから」と言って持っていた山を机に置いてさっさと出て行ってしまった。ハツとして教室内を見渡すが、もう一人の日直の姿はない。大方すでに帰宅してしまったか、部活に行ってしまったのだろう。

中々減っていかない山に半泣きになったのは、多分一時間を過ぎたあたりだった。差しこんでくる西日が余計に寂しさをあおる。

「何してんだ？」

教室の入り口には何故か西森君が立っていた。

「あれ？ まだ帰ってなかったの？」

「ああ。保健室で寝てたら……寝過ぎた」

西森君は乱暴に席に座ると、興味を含んだまなざしを向けて来た。「もしかしてそれ、横島に頼まれたのか？」

「うん……。酷いよね、もう帰る直前だったのにさ。それに横島先生が遅かったせいでもう一人の日直ももう帰っちゃってたんだよ」

私はこの一時間うちのため込んでいた愚痴を一気に吐き出した。

「しかたねえ、手伝ってやるよ」

「え」

西森君は私の意見を聞くこともなく、おもむろに山に手を伸ばした。

「おし！ さっさと終わらせようぜ」

私は呆気にとられながら、西森君を見ていた。

非常事態

「よし！ これでラストだ」

「え、もう？」

西森君の方の書類の山を見ると、バラバラだった紙はそれぞれまとめてホチキスでとめられていた。

「早っ！ さすが、『はやと』だね」

私がかからかい半分で言うと、予想（しらけるかツボって笑うか）に反して西森君は呆然とした表情で私を見つめた。

「ど、どうし」

「もう一度」

ガシツと腕を掴まれ、手に持っていた書類が無造作に散らばった。

「西森君……？」

「もう一度、『隼人』って呼んでくれ」

哀しげな瞳に魅入られた私は、無意識のうちに「はやと」と言っていた。

「……ッ！ やっぱり……やっぱり、同じだ。詩織！」

フワリと薫る西森君の匂い。伝わってくる体温。西森君の腕は、いつの間にか私の体全体を包み込んでいた。

「詩織、会いたかった。俺、あの時からずっと後悔してたんだ。なんで詩織を守れなかったんだ、って」

「ま、待って！ 待って、西森君」

いくら身をよじってもびくともしない。私は声を張り上げて、西森君の話を遮った。

「聞いてちゃいけない。その話はきくと西森君にとって大切な思い出だから。関係のない私なんか聞いて良いはずがない。」

「西森君！ 何か勘違いしてない？ 名前が同じだから、間違えてるだけだよ」

「違うわけないだろ。顔も、声も、この抱きしめてる感覚だって、

全部が懐かしいんだ」

腕により一層力が込められる。私は想定し得なかった状況に混乱し、流れのままに身をゆだねるしかなかった。

刹那。

「え……？」

今までに感じたことのない奇妙な感覚に陥った。

「うわっ！」

西森君の声が聞こえるのと同時に、眼前にあった西森君の体が後ろに流れて行った。

私の体を、すり抜けたのだ。

私は加速する鼓動にしたがい、勢いよく後ろに流れて行った西森君を振り返った。

「西森君」

床にペタンと両手を付いて、私を見ていた。

視線が絡むと、西森君はグイッと私の腕を掴んだ。ちゃんと、掴めていた。

「な、なんだよ今の……？」

常識を超えた現象に、西森君は怯えてるようだった。私自身、自分が起こった非常事態に思考が追いついていなかった。

狂っているようにも聞こえる、西森君の言葉。けれど、その瞳に狂気はうかがえない。代わりに温かで穏やかな色だけが見えた。

知っている。

頭で思い出すことができる記憶の範囲にはない。けれど、この感覚は覚えがある。柔らかく、真っ直ぐで、私を包み込んでくれる感覚。

私はこの眼差しを、知っている。

女の子

冬休み明け初日。窓の外に見える空はどんよりと曇っている。

「はあ」

私は胸のつかえを押し出すように息を吐いた。正直なところ、西森君とは顔を合わせづらい。

私が岡本詩織だと言ってから、西森君は私を見る時に明らかに『岡本詩織』として見ている。記憶のない私にとってはそれは重荷でしかないのに。

「おはよう」

と、女の子の音がクラスに響く。間を置いて、異変を感じ取った。

(静かすぎる)

クラス内が、恐ろしいほど静まりかえっていた。普段は先生が来るまで、それぞれがくだらないことをくっちゃべっているのに……。前の席に視線を移すと、昴君もドアの方を見たまま固まっている。昴君の視線を追っていくと、そこには日本人形を思い出させるような可憐な女の子がいた。

知ってる。

その女の子が視界に入ってきた瞬間、体の中心がカァツと熱くなるのを感じた。それと一緒に言葉にしがたい不快感が込み上げてくる。

私はあの女の子を知ってる。それだけじゃない、私は、私は。

あの女の子の事が。

「詩織！」

強烈な頭痛、かすむ視界。ガタンと盛大な音を立ててひっくり返る椅子。

私は力が入らない体を必死で支えようとしたが、なにせ足に力が入らない。体は重力に任せて、床にたたきつけられた。

痛い。

幽霊なのに、なんで痛いの？

そんな疑問はすぐにかき消された。蘇ってくる記憶によって。

隼人と私（前書き）

過去編スタートです！

隼人と私

「おっはよー、隼人！」

私は朝の挨拶とともに、前を歩いていた大きな背中をバシッと叩いた。

「つてー！ 朝からなんだよ、つたく」

グレーの瞳が拗ねたように私を見下ろす。

「あはは、ごめんごめん」

幼馴染の西森隼人とは母親同士が学生時代の友達だとかで、物心ついた時から一緒に行動していた。

「今日是一緒に帰れる？」

「わりい、今日は部活のミーティングがあんだ」

隼人は小学生のころからサッカーをやっていて、将来の夢はサッカー選手らしい。

「なーんだ、残念」

でも、隼人の邪魔はしたくないし……しょうがないか。

ずっと一緒に育ってきた隼人、いつしかいなくてはならない存在になっていた。

自分のそんな感情に気付いたのはつい最近のこと。これは恋愛感情なのか、それとも家族愛に近い感情なのか、いまだに自分の中で答えは出ていない。

私は隼人が幸せならそれでいい。それが私の幸せなんだから。

「隼人君、ちよつと話があるの」

学校に着くそうそう、サッカー部のマネージャーが隼人を呼び止めた。

名前は、九条すずらん。黒く真っ直ぐな髪が印象的だった。

彼女の黒い瞳が私を捉えた。

「……お邪魔だったかしら？」

気のせいかな、彼女の私を見る時の目つきは、隼人を見る時のそれ

とは別物のように感じる。

「いや、大丈夫だ」

隼人の顔つきが一気に真剣なものになる。長年の付き合いのせい
か、はたまた隼人の性格が顔に出やすいのかは分からないけれど、
はつきりと読み取れた。

「じゃあ、私は先に教室に行ってるね」

部活の話なら私がない方が話しやすいかもしれない。私はそう
思い、そそくさと上履きに履き替えて教室へと歩き出した。

裏の顔

「詩織ちゃん、ちょっといいかな？」

「え？」

珍しく、本当に珍しくすずらんちゃんから声を掛けられた。しかもいつもは見せない柔らかい笑みのおまけつきで。

丸くて大きな瞳に見つめられた私は、ドキリとして、無意識のうち「うん」と答えていた。

「じゃあ、こっちに来て」

彼女はニコリと嬉しそうに微笑むと綺麗な黒髪をなびかせて方向転換した。私の動きなど気にもしていない様子で足早に進んで行くすずらんちゃん。

私は慌ててその後を追った。

「ここは……」

すずらんちゃんを追って着いた先は校舎裏。普段から誰も来ないうえに、日陰でじめじめと湿気を感じる。今日は比較的暑いから、涼しいというプラスの評価もできるものの、積極的に訪れたい場所ではない。

なんでこんな所に？

私が疑問を口にする前に、すずらんちゃんが口を開いた。

「ここならきつと誰も来ないから、ゆっくり話ができると思って」

そう言った彼女に、先程までの笑みはなかった。

立ち振る舞いが教室に居る時とは打って変わって、小動物の様な愛らしさは消え失せ、瞳には男前ともとれるくらいの力が宿っていた。

「単刀直入に訊くけど、貴女、隼人君の何なの？」

「え……？」

「はつきりいつて邪魔なのよ。いつもいつもベタベタベタと。今朝だつて一緒に学校に来てたでしょ！ ム力つくのよ、あんだ！」

想像もしていなかった敵意の塊を私は受け止めきれず、情けない事に何ひとつ言い返せなかった。

「わ、私は隼人の幼馴染で……」

やっとのことではぼりだした一言。でもその後が続かない。

そして初めて気づかされた。

私は隼人の幼馴染であり、それ以上でもそれ以下でもないということに。

「確かに隼人君もそう言ってたけど」

胸に小さな痛みが走った。すずらんちゃんに邪魔だなんだと言われてもこんな哀しい気持ちにならなかったのに。

ただの幼馴染と言う事実だけが、妙に胸につかえる。

「ともかく！ 幼馴染だろうがなんだろうが、今後隼人君に近付かないで！」

すずらんちゃんは言うだけ言って、すぐにその場を後にした。

後に残された私はまだ自分の気持ちを整理できないでいた。

恋心

放課後、グラウンドの方に目をやると、いつも通り隼人の姿があった。

いつも通り。

私は一人で顔を赤くした。

(なんで気が付かなかったんだろう)

こんなにも毎日目で追っていたというのに。

考えてみると、隼人を目で追っていたのは部活の時だけじゃない。教室で授業を受けてる時も、昼休みに友達をお弁当を食べてる時も、いつも隼人が何しているのかは気にかけていた。

それも無意識に。

生き物が呼吸をするのを意識しないのと同じように、当たり前のように隼人を見ていた。

ピーツという笛の音が聞こえると、サッカー部員が一齐に走るのを止め1つの方向に向かって歩き出した。きつと休憩の時間だ。

グラウンドからベンチに向かう人影が多い中、ベンチからグラウンドに向かう人影が一つ。すずらんちゃんだ。

ここからだとよく見えないけど、飲み物やタオルを部員の一人一人に手渡ししているみたいだ。

そして最後に隼人の元へと駆け寄っていった。

もちろん遠すぎて声なんか聞こえない。でもすずらんちゃんごとびっきりの笑顔を向けているのは分かる。

すずらんちゃんがあんな幸せそうに笑うのが隼人の前だけだった。なんで今まで気が付かなかったのか不思議なくらい、特別な笑顔だった。

お昼休みのことで、すずらんちゃんは隼人が好きなのだと分かった。知ってしまった。そして私が知っている事をすずらんちゃんは認識している。

もしも、今さら私も隼人の事が好きだと言い出したらどうだろう。幼馴染を取られたくないという幼稚な独占欲だと思われるだろうか？ それともすずらんちゃんの恋をあえて邪魔する嫌な奴だと思っただろうか？

そういうわけじゃないと知っているのは私だけ。なんて言い訳してもすずらんちゃんに信じてもらえないはずがない。

いや　そもそもすずらんちゃんに信じてもらう必要なんてないのかもしれない。かもしれない。じゃない。絶対に、ない。

部室

いつもと同じ朝。私は隼人の隣を歩いていった。チラリと隼人の方を見ると、私の視線には気付いていないようで、しっかりと前を見つめている。

隼人が好き。

自分の気持ちに気が付いたのは良いものの、私と隼人の仲に変化は見られなかった。私自身、全く同じ態度で接する事が出来ている事に驚いている。

何気ない会話をしながら学校まで行くと、そこにはすずらんちゃん待ち構えていた。

またか、と思った。

あの宣戦布告の日以来、すずらんちゃんは毎日登校してくる私達を昇降口で待ちかまえている。

「隼人君！」

鈴の音のような可愛らしい声が隼人を呼び止めた。

隼人は一度、すずらんちゃんに視線をやった後、すぐに私を見た。「……先に行ってるね」

何を言われたわけでもない、でも感じたのは確かだ。隼人はすずらんちゃんとの話を私に聞かれたくないと思ってる、と。

放課後、今日は月に一度の委員会の日だったので、私は同じ図書委員の子と一緒に図書室へと向かった。

委員会の予算や購入する本を会議で検討した後、購入した本に、種類を分けるためのラベルを張っていった。

委員会活動が終わると、すっかり最終下校時刻になっていたけれど、むしろ私にとっては好都合だった。

昇降口で靴を履き替え、向かう先はサッカー部の部室。まだ隼人が居るかもしれない。そんな淡い期待を胸に秘め、部室のドアを叩いた。

あれ？ 返事がない。

けれど、窓からは明かりがもれていて、人が居る気配はする。

もう一度ノックをするが、やはり反応はない。不躰ではあるが、人の家でもないので、私は扉を開けた。

「……ッ！」

私は、中に居た人達を見た途端、酷い後悔に襲われた。見なければよかった。

そこには予想通り、隼人が居た。けれど、すずらんちゃんも居た。そして、二人は、キス、してた。

失恋

人が入って来た気配に気づいた隼人は顔を上げ、バツチリ私と目が合った。私が隼人を直視できるはずもなく、慌てて視線を逸らして、

「ごめんなさい！」

と、一言。

そのまま二人を振り返ることもなく、私は走った。今見てしまったものを振り払うように必死で走った。全力で走っているはずなのに、さっきの光景が目に焼き付いて消えてくれない。

見えたのは一瞬だけだった。

なのに、映画に出てくる呪いのビデオのように、目を瞑れば何度も何度もしつこいくらいに再生される。すずらんちゃんがめいっばい背伸びして隼人と……。

そこまで思い出して、私は足を止めた。もう学校からもかなり離れたし、わざわざ走ることもないだろう。

ようやく 何年も一緒に居てようやく気付いたのに。気付いたらすぐに失恋だなんてあんまりだ。

走ったせいなのか、気持ちの問題なのか、息苦しくてたまらない。込み上げてくるあまたの感情を抑えつつ、深呼吸を一つ。

すずらんちゃんに隼人を取られて悔しいという気持ちもなかったわけじゃない。でもそんな感情は悲しみに比べたらはるかにちっぴけなものだった。

「隼人……」

薄暗い住宅街で、小さく呼んだ。

もちろん返事は返ってこない。

当たり前のことなのに、何故かそれがショックで、目頭に熱が集中した。

失恋（後書き）

短くてすみません！

後ろの正面だあれ？

いつまでも立ち尽くしている訳にも行かず、とりあえず家に向かつて歩き始めた。脚が鉛のように重い。

帰りたくないわけじゃない。気持ちの上では早くベッドに入つて、布団を頭からかぶって何もかも忘れて眠ってしまいたいくらいだ。でもそんな思いに反して足は全く動いてくれない。

はあ、とため息を一つ。

何気なく自分の顔に触れてみた。涙が這った部分が渴き、嫌な粘着力を帯びている。

異変に気が付いたのは地元では有名なトンネルに差し掛かった時だった。

コツン。

不気味に響く靴音。私のものじゃない。

そういえば、と嫌な話が頭をよぎる。

数年前、このトンネルで殺人事件があった。もちろん、すでに犯人も逮捕されているし、それ以来街灯も増えた。安全の面ではかなりよくなっている。

しかし心細さも手伝って、ひたひたと付いてくる足音は恐怖心を駆り立てる。

後ろを振り向こうかと立ち止まると、一呼吸置いて後ろの足音も止まる。

本格的に怖い。

私は振り向こうかためらった後、前を向いたまま歩き出した。

もしも、後ろに居る人が何かしら怖い人だったら顔を見たら殺されるかもしれない。だったら見ないでとつと人通りの多い方に行つた方が良い。

私は速まる鼓動に同調させるように意識を足に集中させて動かした。

けれど、早足になればなるほど、後ろから聞こえる足音も早まる。それを数分　いや多分数十秒、繰り返したら、私はもはや走っていた。

走る最中、私はついに振り返ってしまった。

目に飛び込んできたのは、二十メートルほど後ろを、同じく走っている男の姿だった。心臓が口から飛び出すかと思った。

私はすぐに前を向きなおし、気を引き締めて足を動かした。

だが、私はすぐに後悔した。思考回路がパンクして頭が回らなかったとはいえ、何故気付かなかったのか。

トンネルを抜けた先は車道だった。

クラクションの音が聞こえた先を見ると、視界が一瞬で真っ白になった。

誤解

強い光に目が眩み、とてもじゃないが動けない。
半ばあきらめかけていた時、

「詩織！」

と、私を呼ぶ声。

その声の主が誰なのか理解するよりも早く、私は歩道へと引つ張られた。

直後、自動車が脇をすり抜けていく。

走り去る車の後ろ姿をぼんやりと眺めている時、ようやく私は誰かに抱きとめられている事に気が付いた。

「何やってんだ、バカ！」

頭上から降ってくる怒声には聞き覚えがある。

首が取れるほどの勢いで見上げると、見慣れすぎた顔。

「は、隼人……？」

「なんで車道に突っ込んで行くんだ、お・ま・え・は！」

額を小突かれ、私は数歩よろけたけれど無視して続けた。

「なんでここに隼人が居るの？」

「あ、えと……それは」

隼人の目が泳ぐ。

「なんて言うか、その……。 詩織、さっきの見てただろ？」

隼人は自らの髪を髪をかき上げ、私から目を逸らした。

『何を』と明確には言わなかったけれど、すぐにすずらんちゃんとのキスの事だと分かった。

躊躇いながらも、私は小さくうなずく。

「あれさ、誤解だから」

「え？」

「あいつが勝手にしてきただけで、別に付き合ってるとかそういうのじゃないから」

「なんで？」

「なんで、って言われても……。こういうの自分で言うのも自惚れてるかもしれないけど、九条が俺の事」

「そうじゃなくて！」

「ずらんちゃんや隼人の事を好きなのは知ってる。でもそれを隼人から聞くのは、なんだかすごく腹立たしくて、自分で思っていたよりも強い口調で遮っていた。」

「そういうことじゃなくてさ。なんで隼人は、そんな弁解じみた事を私に言うの？」

「今、私はどういう顔をしているだろう。泣きそうなのか、笑っているのか、自分でもよく判らない。」

「私に言う必要ないよね。だって」

「コクリと唾を飲み下す。」

「か、彼女でもないのにさ」

「情けないほどに震える声が聞こえた。自分で出したつもり声と、耳に入ってくる声が全然違う。」

「確かに」

「隼人の声がやけに落ち着いて聞こえる。」

「俺達は幼馴染だし、報告する義務はない。でも、俺が誤解されなくなかったんだ」

「どうして？」

「私はつくづく浅ましい。答えなんて考えればわかるはず いや、すでに頭の片隅で理解しているのに。」

「ったく！ 言わなくても分かったの！」

「いつもの調子の隼人の声になるが、それでも私の緊張は全然ほぐれない。」

「幼馴染から卒業したいと思ってたのは俺だけだったのか？」

両想い

「それって……」

「詩織が好きだって言っただよ！」

隼人の語尾が強くなる。長年の経験からそれが照れ隠しであると分かった。

隼人の気持ちを聞くことができ、私はようやく自然に笑えた。

「私も」

そう言いながら、突進とも取れる勢いで抱きつくと、私の予想に反してしっかりと抱きとめられた。

「隼人の事が好きで、好きで、悲しかった」

「は？」

「ずらんちゃんと付き合い始めたのかと思って、悲しかった」

「だからあれば、」

「うん。分かってるよ。でも、さっきまで本当に」

言いながら先程までの事を思い出す。

すると、とんでもないことに気が付いた。

私は、先程突進して行ったのを巻き戻すかのように勢いよく隼人から離れた。

「詩織？」

何が何だか分からないというようにポカーンとしている隼人を無視して、私はあたりを見回す。

「隼人！ さつき怪しい人見なかった？」

私なんて車道に飛び出したのかと言えば、追いかけていたからだ。

見回せど、人影らしきものは見当たらない。

「さつきね、後ろから付けてくる人がいて、すんごく怖かったんだ」

「え……？」

「トンネルのところで気が付いたんだけど、私が走り出したら、走

「つて追いかけて来たの」

「あのさ」

「ん？」

「怒るなよ？」

何故かバツが悪そうな隼人、人をからかうのが趣味の様な彼に
しては、珍しいセリフだった。

「それ……俺だよ」

「はあ？」

よくしゃべる隼人、あまりしゃべらない詩織

「その後」

と、隼人が言った。

「詩織に見られてたつて分かってすぐに追おうとしたんだけどさ、九条の奴がなかなか離してくれなくてな」

「うん」

「だからあと追うのが遅くなっちゃって、一度は詩織を見失っちゃまったんだ。それでようやく見つけた時、詩織はあのトンネルの方向に歩いててさ……」

隼人の眉間に深いしわが刻まれる。

「うん」

私が再度促すが、隼人は中々続きを話そうとはしない。

「隼人？」

「実はな」

隼人は私と目を合わそうとはせず、声も心なしか小さくなった。

「俺見てたんだ、詩織が泣いてるの」

隼人はボソボソと、聞こえるか聞こえないかの声で言った。私は今泣いている訳でもないのに、目元を拭った。

「そう、なんだ」

私の言葉に隼人はコクリとうなずいた。

「その時な、詩織の顔が笑顔から一瞬で驚きが変わってたの思い出して、ああ俺のせいなんだ、って思った」

隼人はそこで一息つくと、壊れものにも触るかのような優しい手つきで私の髪を撫でた。

「ごめん」

「ううん、気にしないで。だって誤解だったんでしょ？」

「ホントごめん、そうじゃないんだ。本当だったらさ、泣いてる詩織を見たら、俺も悲しくなるはずなんだ。実際、今まではそうだった

たし。　なのに、さつきは泣いてる詩織を見て、悪いと思ってる
気持ちももちろんあるんだけどな……少しだけ、ホントに少しだけ
だぜ？　詩織が俺の事で泣いてるのが、嬉しかったんだ」

「え？」

「今まで詩織の事を好きだって言えなかったのは、詩織が俺と同じ
気持ちじゃなくて、言ったら、幼馴染っていう　なんて言うのか
な、最終ラインの様な最低限の、でも絶対的な　絆までも消えち
まいそんな気がしてたからなんだ。でも詩織が泣いてるって事はさ、
つまりは、詩織も同じ気持ちだったって事だろ？　それがさ、すご
く嬉しかったっつーか、安心したっつーか……」

段々と小さくなってい隼人の声。私は嬉しくて、泣きながら笑っ
ていた。

子犬原理

「それで詩織に言おうって思ったんだ。好きだ、って」

こんなずるい男で悪いな、と隼人は自嘲気味に続けた。

私と目が合うと隼人はコホンツと軽く咳払い。そのまま視線を前へと移し、家の方へと歩き始めた。

「で、だ」

と、咳払いで気持ちが切り替わったのか、少しはつきりした声になった。

「話しかけようとしたら、詩織が何故か逃げてったってわけだ」

「だ、だってあんな所で追いかけてきたら怖いでしょ！」

私は先程逃げていた時の事を思い出して、酷い羞恥心に襲われた。逃げている時はものすごく怖かったし、必死だった。けれど相手が隼人だったなんて夢にも思わなかった。

「そりゃあそうなんだけどな」

と隼人は、それはもう意地悪そうに、ニヤリと口を歪める。

「逃げられると追いかけたくなるって心理、解かる？」

そう問われて私は言葉に詰まった。私の頭に真っ先に浮かんだのは、さっきのような非常時でのことではなくて、すずらんちゃんのことだ。

私は隼人の事が好き。しかし、それを気付かせてくれたのはすずらんちゃんの言動。隼人が私の元から去ってしまいかもしれないという危機感が、私の感情を自覚させたのは紛れもない事実だった。

そう考えたら、私の想いが突発的で薄っぺらいものに思えて来た。「隼人」

私は半歩前を歩いている隼人に声をかけた。

あと数十メートルで家というところで足を止めた私を不思議そうに見下ろしている。

私はそのグレーの瞳を見つめて、

「好き」
「好き」
と言った。

好きだけど

「な」

と、隼人のかすれた声が耳に入る。

それから数秒の間を開け、

「なに言ってるんだよ！」

と隼人は顔を赤くしながら言った。

慌てふためく隼人とは対照的に、私はどこか冷めている風に見えるふるまいをしていたと思う。

酷くもどかしかった。伝えたいことが言葉に出来なくて、必死に自分の気持ちを整理しする。けれど自分の中にある感情が複雑に絡まっついて言葉に変換する事は出来ない。

「隼人、好きなの」

私はただどしく、ただそれだけを言った。

「……ッ！ お、俺もだ」

いつ誰が通るかも判らない住宅街。そんな事をも気にせず私達は抱き合った。

「ずっと、好きだからね」

だからずっと好きでいてね、と思った。口に出すと押し付けがましくなってしまう。けれど、どうしても望んでしまう本心。

暗闇の中にぽつんぽつんと置かれた電灯が隼人の顔を映し出す。見慣れているの隼人の顔にはいつもとは違う色が浮かんでいる。グレーの瞳に魅入られているなか、徐々にそれが近づいてきた。

「詩織」

甘く呼ばれてハッと我に返る。気が付けば、吐息が顔に掛かるほどの距離になっていた。

「あ、ちよ……。ちよっと待って！」

私は慌てて隼人の胸を押した。

「なんだよ」

と、不服そうな隼人の声。

同時に少し距離があく。

ドキドキなんて可愛いものじゃない。バクバクと心臓が暴れているようだった。どれ程走ったとしてもここまで心拍数が上がった事はかつてないはずだ。

「は、ははは隼人！ 今、」

「だめか？」

「だ、ダメって言うか……」

心の準備ができてない！

「ま、また今度ね！」

私はそれだけ言うと、慌てて自分の家の方へと駆けだした。恥ずかしさで隼人と顔を合わせられるはずもなかった。

気まずさ

どこの古代文字を扱っているのかと思うほど意味のわからない数学の授業中、私は斜め前の背中に目をやった。

ペツタリと机に密着して居眠りをしている隼人だ。

今朝は幸いにもサッカー部の朝練があつたため、顔を合わせずすんだけれどこうしている事は何の解決にもなっていないかつた。

授業が終わりお昼休みになれば、こうしているわけにもいかない。

憂鬱で、とてもじゃないけど授業なんて頭に入つてこない。

なのに時間は恐ろしいほどの早さで過ぎて行く。

溜息を吐いたのと同時にチャイムが鳴った。隼人が身を起こして立ち上がる。

私は隼人と顔を合わせる事に身構えた。

「詩織ちゃん」

私はピクリと身を震わせた。

思わぬ方向から声が聞こえ、慌ててそっちに目をやると、視界に入ってきたのはすずらんちゃんだった。

「な……なに？」

後ろめたい気持ちになかつたわけじゃない。

すずらんちゃんのお持ちを知っているながら、私は隼人と付き合うことを選んだのだから。

「話があるの。分かつてるよね」

そう言った彼女の表情はこの前校舎裏で見たものだった。

知ってる。そう感じた。すずらんちゃんは私と隼人が付き合い始めたのと知って話し掛けてきてる。

「うん」

私の返事を聞き終わるか終わらないかというところで、すずらんちゃんは長い髪を翻して歩き出していた。

その後ろを付いて行く。その時チラリと隼人に目をやると、不安

げに私を見ているのが分かった。

だ・い・じょ・う・ぶ。

私は口パクでそう伝え、心配させまいと微かに笑ってみせた。

侮蔑

「貴女という人間がここまで最低だとは計算外だったわ」

「すずらんちゃんは言葉の内容とは裏腹にとても可愛らしい口調でそう言った。」

「私、言つたわよね。隼人君の事が好きだって。なのにその直後に付き合いだすなんて……詩織ちゃんはすっごく神経が太いんだね」
「すずらんちゃんは、この校舎裏と同じようにじめじめとした嫌みを、敵意を込めて言い放った。」

「……ごめん」

と言つて私は俯いた。

「ん？別に謝ってもらいたくて言つたわけじゃないから、謝らなくていいのよ」

「え」

「すずらんちゃんの柔らかい言い方に微かに希望を感じて、顔を上げた。ニコリと笑うすずらんちゃん。」

「謝らなくていいの。隼人君と別れてさえくれれば」

「え」

同じように発した声だけど、意味合いは全然違った。

「当たり前でしょ。第一、貴女じゃ隼人君と釣り合わないわ」

「そんなこと」

「じゃあ聞くけど、貴女は隼人君がどれだけ努力してるか知ってるの？隼人君がサッカーにどれ程の情熱を注いでいるか……それはいつも傍で見てる私にしか分からないわよ」

「でも、それは私が隼人と付き合い合つてることとは関係ないし」

「勢いに押されて、語尾が段々と小さくなっていく。」

「関係ない、ですって？……うふふ」

「すずらんちゃんの口元から侮蔑を含んだ笑いが漏れた。」

「一体何だというのか。恋人関係であることと、夢は別物だ。それ」

に隼人がサッカー選手になりたいことだっけ知ってる。

「詩織ちゃんって本当に隼人君の事好きなの？ とてもじゃないけど私には信じられないわ。だってそうでしょう、普通なら好きな人の夢は応援したいと思うじゃない」

「すずらんちゃんは真剣な眼差しを私に向けた。」

「貴女に何ができるの？ 隼人君の夢をサポートしてあげるの？」

「……」

何か言い返したいのに何も言えない。私の方が隼人の事好きだって自信があったのに、振り返ってみたら私は隼人のために何もしてあげてなかった。

俯き、黙り込んだ私にすずらんちゃんはだめ押しとばかりに冷やかな言葉を浴びせて来た。

「分かったみたいね。貴女は隼人君にとってなんのメリットもないの。一緒に居ても役に立てないんだから、さっさと私に彼女の座を明け渡さない」

洞察

私は麦茶の入ったコーヒークップを手に、そわそわとしていた。周りをキョロキョロと見回すと、目に入ってくるのは見たことのない外国人のポスター、トレーニング法が載っているであろう雑誌。他にも寄せ書きの書かれた小さなサッカーボール。

やっぱり隼人はサッカーが好きなのだと思つた。

今、私が居るのは隼人の部屋。恋人同士という関係になつてからこの部屋に来るのは初めてだ。昔はよく遊びに来てたのに、小学校を卒業してからめつきり来なくなつた。

そういえば前に遊びに来たのはいつだったっけ。

記憶をたどつていた時、ガチャリと音を立ててドアが開いた。

「わりい、今菓子コレしなくて」

申し訳なさそうに隼人が手にしていたのは封の開いていたおせんべいだった。その様子が何だか面白くて私は思わず嘖き出した。

「いいっていいって！ 隼人に気を使われたらなんか緊張するし」

ただ、笑いながらも頭をよぎるのはすずらんちゃん言葉。隼人の部屋に来て、さらに現実を突きつけられた気分だ。

隼人の事はどうしてもあきらめられず、かといってすずらんちゃんに返す言葉もなく私は逃げ出し、今日まですずらんちゃんとは口をきかなかつた。それどころか目も合わせないように気を付けていたくらいだ。

「 九条に何か言われたのか？ 」

抜き身の真剣を突き付けられたかのような気分だった。顔は笑つたままこわばり、目だけが見開かれる。

「ど……」

どうして、と言いかけて思いとどまる。

「そんなの詩織の顔見りゃ分かるって。何かあつたんだろ？」

隼人は私が思っていたよりも私の事を見抜いていた。

好きなのは君だけ

「隼人はさ、サッカー選手になりたいんだよね？」

「なんだよ唐突に……。それよりも九条に」

「やっぱりサッカーの知識のある彼女の方がうれしいんじゃないの？」

「……それ、九条が言ってたのか」

隼人は深く溜息を吐いた。それと同時に瞳が鋭くなる。

「あのな、俺は別に詩織に手伝ってもらって夢を叶えたいなんて思っ
つてない。

別に手伝ってくれるならそれはそれで嬉しいけどさ、

詩織には詩織の思う様にして欲しいから……。そんな事気にすんな！」

「ホントに、いいの？」

「そんなに俺の言葉が信用できないのかよ？」

「そんなつもりじゃ……」

少しだけ強くなる隼人の語尾に私は曖昧な否定を返す。

隼人が信用できないなんて事じゃない。でも、何か一つでも私より
すすらんちゃんの方が魅力的だと思っような要素があつて欲しく
ないのも事実。

「本当の事言つてね、隼人」

「ん？」

「自分の趣味をきちんと理解してくれる彼女と自分の趣味に興味を
示してくれない彼女、どっちが良い？」

隼人が望むのなら私は死に物狂いでサッカーの勉強をする。せめ
てすすらんちゃんに劣らないくらいには。

「詩織……お前なあ」

隼人のグレーの瞳が揺れた。

グツと力を込めて右手を掴まれる。

「隼人？」

「詩織は、俺の事を理解してくれない彼女なんかじゃない。ちゃんと考えてくれてるだろ、こんな風に今だって」

無意識なんだと思う。私の腕を掴む力よりが強くなる。

「俺は彼女が欲しくて詩織に告白したわけじゃない。ただ詩織が好きだったからなんだよ」

待ち伏せ

「人を好きになる事に理由なんてつけられねえよ」

そう言った隼人の視線は、外すことなく私を捉えていた。

「ごめん……」

私はどうやらおごっていたらしい。

女の子である私の方が恋愛というものをよく理解していて、隼人にはそれが分かっていないと、心のどこかで思っていた。

まさに恋に恋する女の子。恥ずかしいと思ったらない。隼人は（少なくとも私よりは）ちゃんと人間というものに向き合っていた。

人を好きになるのに理由なんていらぬ。そんなの当たり前なのに一体何を勘違いしていたんだか。

「ごめん、隼人」

もう一度謝ると、隼人の手がスツと離れ、そのまま私の頭を撫でた。

「俺が好きなのは詩織だけだ。だから九条が何言っても気にすんな

……いや、何か言ってきたら俺を頼れ」

「うん」

ツンと鼻が痛む。隼人の優しさに泣きだしそうになるのをグツと抑え込んだ。

次の日、私は隼人と一緒に登校した。当たり前のことだけど、きちんと気持ちを通じた後だからか今までよりもずっと楽しいし、なんか誇らしい。

「おはよう。隼人君、詩織ちゃん」

何故かいつもいつも下駄箱の前で出会うすずらんちゃん。きつと隼人を待ち伏せでもしているんだろう。

「おっす。今日はなんか話あったか？」

口調はいつもの通りの隼人。だけど顔全体が微妙に強張っていた。

昨日のこともあつて警戒心が働いているらしい。

でもきつと気付いてるのは私だけ。すずらんちゃんはもちろん、本人だつて気付くかどうかの些細な違い。

「ううん、今日は」

笑顔で話していたすずらんちゃんの視線がスツと動く。目の形は確かに笑っているはず、なのにまぶたの隙間から見える瞳は全然笑っていないかった。

「詩織ちゃんに話があるの」

三度目

「私？」

「うん、いいよね？ まだ時間あるし」

そう言つて、校舎に取り付けられている大きな時計を見た。

八時十五分。三十分からホームルームだから確かにまだ時間はある。

「うん」

反射的に返事を返してしまつた。「あ！」と思つた時にはもう遅い。

「じゃあいつもの所に行こう？」

すずらんちゃんは急かすように私の手を取つて歩き出した。

「ちよ……」

「詩織！」

隼人が呼んだ。するとすずらんちゃんの足がピタリと止まり、

「隼人君、心配し過ぎだよ。別に取つて喰おうつてわけじゃないんだから」

振り返りながらそう言つた。

顔に張り付いた笑顔が怖い。そう、思つた。

最初に受けた可愛らしい印象はなく、昼ドラにでも出て来そうな、まさしく女だつた。

「行くよ！」

再度引つ張られ、つんのめりながらもなんとか付いて行く。

校舎裏に来るのはこれで三度目だ。全てすずらんちゃん絡み。

じめじめとした雰囲気ですずらんちゃんに馴染む。

「詩織ちゃんさー、まだ隼人君と登校してくるとか……一体どういふつもりなの？」

妙な迫力を感じた。私は何も間違つたことをしていないはずなの

に、何故だか言いくるめられてしまう様な威圧感。

「は、」

私はかすれた声を治すために、そして冷静になるために唾を飲んだ。

「隼人は私にサッカーの知識がなくても良いって言うてくれたもん！」

「だから何？ ないよりあった方が良いに決まってるじゃない」

ふと、ある事に気が付いた。

「隼人が、サッカーの知識のあるすずらんちゃんよりも、私を選んだって事は……つまり、私の事をすずらんちゃんとは比べるまでもなく好きだって事じゃないの？」

ただなんとなく思った事を口にした、それだけだった。けれど、すずらんちゃんの表情は固くなり。徐々に怒りが読み取れるようになっていった。

「な………！」

卑怯者

「あんだ……生意気なのよ！」

怒声とともに、頭部に強い衝撃。頬がじんじんと痺れた。

「殴る事しかできないって事は……やっぱりすずらんちゃんだって
そう思ってるんでしょ？」

「うるさい！」

はあはあと荒く呼吸をする音だけが耳に入る。

「あ、あんだがいかに隼人君に気に入られていたとしても、絶対に
隼人君は私を選んだから！」

「そんなわけ」

「私のお兄ちゃん、サッカー部のキャプテンなのよ」

これがどういう意味か分かるわよね、と興奮気味に続ける。

すずらんちゃんの口は綺麗な三日月を描いていた。

嫌な予感がある。きっとその兄に頼みこんで、隼人と付き合う気
なんだ。

「卑怯者」

私が恨めしさをたつぷりと込めて言うと、すずらんちゃんの眉が
ピクリと動いた。

「卑怯？ 私が？ 詩織ちゃん、貴女には言われたくないわ」

すずらんちゃんはフンと鼻で笑った。

「私が隼人君の事を好きだと言ったすぐ後に、付き合いだすような
貴女はどうなの？ それに、私が悪者かのように隼人君に吹き込ん
だんでしょ？ 最低には最低で返す。それだけよ」

すずらんちゃんは左手にはめた腕時計に目を移す。

「じゃあ、そういう事だから。はじめに振られる前に身を引く事ね」
そう言つと、すずらんちゃんは昇降口の方へと歩きはじめていた。

「ちよつと待って！」

「何よ？」

すずらんちゃんも立ち止まって振り向いた。

「どうして、私が隼人にすずらんちゃんの事話したって思ったの？」

「……分かるに決まってるじゃない。私は入学してからずっと隼人君だけを見て来たんだから」

と、すずらんちゃんは当然のように言った。そして私を一睨みするとそのまま去っていく。

すずらんちゃんが気付くはずがない、と決めつけていた隼人の微妙な態度の違い。それを当たり前のように見抜いていたすずらんちゃん。

まさか隼人が先輩に言われたからといって別れるとは思わない……

…けど、ほんの少しだけ不安を感じる。

一つの確信が崩されると、他の確信も間違っているのではないか、と思ってしまう。

幸せな気分はもはや消えうせ、代わりに不安と恐怖だけが残っていた。

放課後、私は沈んでいく夕日とグラウンドを駆ける隼人をボーッと眺めていた。目に入るその姿はいつもなら私に穏やかな喜びを与えてくれたのに、今日はそれが無い。

部活が終われば隼人と帰れる。けれど幸せな気分だけじゃなく、すずらんちゃんのお兄さんの事を考えると、すごく複雑な気分だった。

ピーツと響く長い笛の音。部活終了の合図。

私は鞆を肩に掛け、そのまま教室を後にした。

部室からはぞろぞろと部員が出てくるが隼人の姿はまだ見えない。隼人を探しながら、すずらんちゃんに出来るだけ見つからないようにする。

遅い。

他の部員たちが続々と出てきているにも拘らず、隼人の姿はおろか影も形も見えない。

前例もあるのであまり気が乗らないが、部室を覗いてみることにした。

トントントンとこの前と同じようにノック。この前と同じように返答はない。嫌な記憶がよみがえり、このまま帰ってしまいたい衝動が体の奥から突き上がってくる。

帰ってしまおうか……？ 明日にでも、謝れば問題はないだろう。こんなに待たせる隼人が悪いんだ。

私はドアに背を向けた。

ガチャリ、と無機質な音。大した大きさの音じゃないのに、すごい勢いで心臓が跳ねた。

「じゃだ、そういうことなんで」

耳に届くのは隼人の声。後ろを振り向くと、そこには制服に着替

えた隼人の姿。

「……分かった」

部室の中からは隼人じゃない人の声が聞こえたが、隼人の姿に遮られてしまい、誰なのか全く分からない。

「待たせたな。さ、帰ろう詩織」

「え？ ええ？」

隼人は私の手を取って歩き出した。ただ手を繋いだけじゃない。互い違いに指をからめた。俗に言う恋人繋ぎ。

「待って、隼人。一体」

「あとで話す」

隼人のその言葉を最後に、私達は無言で学校を後にした。

意志

すっかり日が落ちた住宅街を私達は、手を繋いだまま歩いてきた。チラリ、と隼人に目をやる。真っ直ぐ前だけを見つめたその表情からは何を考えているのか予測も付かない。

「ねえ、隼人」

「ん」

思い切って声をかけると、中途半端な、けれど確かに、返事が返って来た。

「ねえ！」

「だから、なんだよ？」

私の言葉を聞いているはずなのに全然こつちを向いてくれない。グイッと手を引っ張り無理矢理こつちを向かせた。

「さつき、部室で何か話してたでしょ？」

「ああ」

勇気を出して発した言葉は隼人のたった一言で終えられてしまいそうだった。私は慌てて、

「誰と話してたの？ ずいぶん遅かったじゃない」

と、続ける。

「……九条先輩だけ」

少し、ほんの少しだけ間があつたが、隼人はなんでもないように装って言った。けれど、私がそれを気にしないわけがない。

「九条……って、すずらんちゃんの」

「兄貴だ」

事もなげに一言。妙に冷静な隼人を前にしているせいか、私の中にも焦りが生まれなかつた。

「なんて……言われたの？」

「……」

「隼人？」

「想像、ついてんだろ？」

隼人から向けられた冷たい視線に痛いと感じた。憎しみすらも籠っているような視線。その怒りは私に向けられているものではない。なのにとっさに謝ってしまいそうになる。

「別れて欲しい、ってさ」

隼人が憎々しげに言い放つ。眉間にしわを寄せ、目は私を見ているはずなのに、焦点は私に合っていないようだ。

「九条に……妹に頼まれたんだと」

予告はされていたけれど、あらためて聞かされるとイライラが脳内を駆け巡る。なんて卑怯な人。自分の事を好きになってもらうために隼人の好きなサッカーを使って圧力をかけてくるなんて！

「まあ、でも心配はいらねえよ」

「え、どうして？」

複雑な表情を浮かべて、私の頭を撫でた。

「九条先輩には別れることなんてありえない、って言っただけ。もししたら、納得してくれて妹を説得してみるって考え直してくれてな……。だからそんな不安そうな顔するなよ、詩織」

「だって隼人、大丈夫なの？ 私と別れないとサッカー部に置いとけないとか」

「言われてねーよ、そんな事。九条先輩はサッカーに私情をはさむような人じゃないからな。まあ妹は可愛いみたいで、今回は直接俺に言ってきたみたいけど。別に脅してきたわけじゃねーし」

隼人は私の頭にあつた手を乱暴に動かす。

「ちよ……！」

もちろん隼人の手によって髪の毛はボサボサ。もう帰るだけとはいつても、さすがに鳥を飼っているかの様な頭じゃ歩けない。近所の人に見られたら笑いのネタにされかねないじゃないか。

急いで手櫛で髪を整えると、あははと声をあげる隼人。

「わりー、わりー。いやー、でも見事に鳥の巣になったな」

ついさっきまでしかめっ面をしていた人とは別人だ。思いきり笑

う隼人につられて私も、文句を言おうとしていた事も忘れて笑った。

宣戦布告

お兄さんの説得に応じたのか、すずらんちゃんの朝の待ち伏せや、教室で睨まれるようなこともなくなつた。

はず、なのに！

「隼人君、今日の部活の後ちょっと時間にいいかな？」

すずらんちゃんは隼人にまわりつくように傍に寄り添い、はたから見たら恋人同士のようだ。イチヤイチャと効果音が付きそうなくらい積極的ならずらんちゃんを私は恨めしく思いながら見ていた。バツチリと目が合い、様子をうかがっている事に気付いた隼人。

「九条、いい加減に」

「部活の話なだけどな」

注意しようとする隼人を、部活という大義名分を持ち出し制止した。どうせ部活なんかじゃないくせに、と私は当然のように思った。「本当だろうな？」

どうやら隼人も同じように思ったらしい。隼人はとても女の子に向ける視線とは思えないくらい厳しい目つきですずらんちゃんを見た。それに対して全く怯むこともなく、すずらんちゃんは笑つてみせた。

「本当だよー。隼人君、最近疑り深いー」

耳を塞ぎたくなるような いや、すずらんちゃんの口をふさぎたくなるような甘つたるい声で言った。それでも隼人は不機嫌な表情を崩す事はなかった。

「もう、冷たいな。前はそんな態度じゃなかったのに」

すずらんちゃんは隼人から離れつつそう言った。じゃあ放課後、とすずらんちゃんは言うのと、私の方に向かって歩いてきた。

私を視界にとらえるとニヤリと笑う。まるで私がずっと二人の会話を聞いていたのを知っているかのように。ううん、多分確信してる。私が隼人とすずらんちゃんの会話に興味を抱かないはずが

ない。

「隼人君が冷たいのも詩織ちゃんせいなんだよね。」

絶対に許

さない」

すれ違いざまにそう言ったすすらんちゃん。その言葉はいやに私の脳に響いた。

奇襲

コツコツと鳴る靴音は珍しく一人分だった。隣を見ても隼人は居ない。

今日は部活が終わってもすぐに帰れないから先に帰るように、と言われた。その会話の中ですずらんちゃんの名前は出ては来なかったけれど、隼人の用事がすずらんちゃん絡みなのは私も知っているし、隼人も私が知っている事を分かっている。互いに分かっているはずらんちゃんの名前を出せないのは気まずいからに他ならない。楽しいはずの隼人との会話に気を使わなければならなかったはずらんちゃんがたまらなく憎らしかった。

すずらんちゃんの事を考えるのをうち切り、隼人の事だけを考える。浮かぶのはボールを追いかけグラウンドを駆ける隼人。今頃隼人はいつものように部活をして、そして。

そこまで想像をして、再度ムカムカが込み上げて来た。今日は部活の後はずずらんちゃんと二人っきりで部屋に残るのだろう。隼人にその気はなくとも、相手にはある。すずらんちゃんはあの大きな瞳で隼人をみつめ、隼人に迫る。

私の想像の中のすずらんちゃんはそのまま隼人との距離を縮めていって、そして軽く口づけた。

「そんなの、嫌」

しよせん想像の中の出来事、と軽くは思えない。そりゃあそうだ、実際に一度は目撃しているのだから。

思い出すと怒りと悲しみが一気に込み上げてきた。

叫び出したいという気持ちを抑え込んだと同時に、想像に持つていかれていた意識を現実へと戻した。

いつもと同じ様な住宅街。けれど、それは似ているだけでいつもとは違う。どうやら曲がるべき角を少し過ぎてしまったらしい。周りが見えなくなるとはまさにこの事だ、と内心苦笑いをしてくるり

と身を返した。

「なっ　！」

いきなり逆に歩き出したら周りの見る目が恥ずかしいな、などとくだらないことを考えていた私の目に飛び込んできたのは、五、六人の覆面を付けた男達（体格で分かった）だった。

「岡本詩織だな」

やはり低い声だった。本能的に危機を察知した私は先程まで進んでいた方向へと、再度踵を返して走り出した。

心当たりも何もない。けれど私の名前を知っていた男。異様ないでたちは、逃げ出すには十分な理由だった。

この前と同じような状況。ただし、今回の相手は複数。どうして立て続けにこんな目に遭わなきゃならないんだと思いつつ、必死に足を動かした。

しかし、スピードに乗る前に私はあっけなく捕まった。

「おとなしくしろ！」

「　っ！」

私は短く息を吸い込んだ。

「きゃあ……ぐっ」

叫びは音となる前に抑え込まれた。

「黙れ！」

声とともに容赦ない一撃が私の首裏に入り、意識が闇へと沈んでいった。

拉致

「……っうっ」

冷たい石の感触を頬に感じて、私は目を開けた。映るのは汚れた灰色。どうやらコンクリートの床らしい。

そんな不潔な所に顔を押し付けているなんて、一体私はどうしたというのか。体を起こそうと力を込めるがどうもおかしい。自由が利かない。後ろに固定された手首と足首に感じる締め付けからどうやら縛られているらしいという事だけは理解できた。

ここはどこ？ 一体私は何をしてるの？

「気が付いたか」

声のした方向を見ると、覆面を付けた男が私を見下ろしていた。

そうだ、私はこの怪しい奴らから逃げようとして、逃げ切れなくて

……捕まっただんだ。

「誰？」

「さあな」

男の一人は淡白にそう答えると、ツカツカと靴を鳴らし私に近付いてきた。他の男たちはその姿を黙って見ている。どうやらこの男がリーダーの様だ。

「さっきは答えを聞きそこねたからな」

ガシリ。

男は私の顔を大きな手でわしづかみにした。

「お前が岡本詩織だな？」

覆面からのぞく鋭い双眸が私を睨む。恐怖半分と答えるものかという意地半分で、私は沈黙した。

「はっ……。答えないうて事は肯定ととるぜ？」

「……」

「生意気なクソガキだ！」

そのまま顔を離されると、私は先程と同じように這いつくばった。

「まあ、聞いていた特徴にぴったり一致するから間違いはないだろう」

ひよろりと背の高い男がリーダーの男に言った。

「ああ、おそろくな」

その言葉を最後に、男たちは私を囲むように立った。

「何する気？」

「お前、西森隼人の実家がどんな家か知っているか？」

「はい？」

予想外に飛び出した名前。私はリーダーの男を見つめた。

「西森家と言えばちよつとした名家だ。普通の家の普通の子供を相手にするような事はないだろう」

「何を言ってるの？」

「いやあ、別に。ただ俺は、あんたと西森家の跡取りとは釣り合わないという事実を述べてるだけだが？」

ここまで聞いて、ようやく話が見えてきた。私はなんて愚かなんだろう。

隼人の家がどうこの話じゃない。私がすずらんちゃんの計画通りに踊らされているという方だ。

「貴方達、すずらんちゃんに言われて私を攫ったんでしょ？」

私がそう問うと、男たちは鼻で笑う。

「いや違う。俺達はただあんたが気に入らなかつただけだ」

覆面の上からでも、笑ったのがわかった。

「卑怯者……」

憎々しげに言い放つ。もちろん相手は目の前に居る気味の悪い男たちに、ではない。今頃サッカー部の部室でほくそ笑んでいるであろう性悪女に、だ。

「で、私が隼人と別れるとでも言えば解放してくれんの？」

絶対言わないけどね、と心の中で付け足した。

暴力

「残念だけど、そうじゃないんだ」

ネットリとまとわりつくような猫なで声で私にそう言ったのは、先程リーダーに意見していた背の高い男だった。

その男は、値踏みするかのように私に視線を這わせる。心底気持ちが悪い。

「君、なかなか可愛いね」

その言葉に悪寒が走った。

視線が、顔、首、肩、胸、腹……と徐々に下りて行き、もう一度顔に戻って来る。

ペロツと何気なく男は自らの唇を舐めた。しかし、それが非常に気持ち悪い。

「本当に、イイ。これなら犯し甲斐がある」

サアアッと血の気が引いき、体がこわばった。

覆面から覗く瞳で、分かる。この男の目は本気の目だ。

「でも」

かろっじて出た声に、残った強気を込めた。

「そんな事したって、意味ないよ。こんなくだらない事で犯罪者になり下がるつもりなの？ あんたたち」

「無駄、だど？」

今にも手を出してきそうなひよる長の男を制止しつつ、私に問いかけるリーダー。

「だって……、こんな事したって私は隼人と別れないもん！」

私は、本気だ。たとえどんな目に合わされようとも、別れるという選択はしない。そんな選択をしたらすすらんちゃんの思うつぼ。

それだけは絶対にイヤ。

「……ハッ、ハハハハハハ」

リーダーが声を上げて笑うのと同時に、他の奴らも服面から覗く

目を三日月形に歪めた。

私はこうまで笑う理由に見当もつかず、ただただ力一杯睨みつけた。

ひとしきり笑い終わると、リーダーは、

「だから、さっき言ったじゃねえか」

と言った。

「いいか？ 西森家は名家なんだ。ただでさえ普通の家の娘であるお前なんて、本来相手にふさわしくない」

「けど」

「そうだな。西森隼人本人がお前を選んだら、家の方も、しぶしぶだろうが納得せざるをえないだろう。だから、今日この作戦が決行されることになったんだ」

「……」

私は言っている事が良く理解できず、黙って続きを待った。

「さあ、話はここまでだ」

リーダーの男はそう言うと、制止していた手を、解いた。

檻から放たれた獣のごとく一直線に私に向かってくるひよる長い

男。声を出す間もなく、押し掛かられる。

「……つやめて！」

手も足も動かない私の抵抗手段は声しかなかった。

「離せ！ バカ！ 犯罪者！」

「なんとでも言え」

興味ないという風に、私の体を押さえつける。

「このお……ガリのつば！」

リーダーを始め、周りで見ていた男たちが声を上げて笑う。

「ぴったりじゃねえか」

「まさにその通りだ」

「ズバリだな」

ガリのつばをからかう声がいくつも上がる。

ガンツ。

ガリのっぱは私を忌々しげに睨みつけそして……私の顔面を殴った。

「うるせえんだよ、クソガキ！ 少し黙れ」

頭と胴体がバラバラにならんばかりの衝撃。

頬には鈍い痛みが残り、右目の視界が極端に悪くなった。

降ってくる拳は一つや二つでは治まらなかった。

「おいおい、何やってんだ」

混濁（前書き）

お久しぶりです、すみません。

混濁

リーダーの男のため息混じりの声がぼんやりと聞こえた。その声に反応したガリのつぽは私に浴びせていた拳を止める。

「痛めつけるのが目的じゃないだろ？」

「……ああ、そうだったな」

押さえつけられ身動きが取れない。

「大人しくしろよ」

低く冷たい声でガリのつぽはそう言った。その手には、どこからか出したのか刃渡り20センチくらいのナイフが握られていた。

恐怖で身がこわばる。まるで筋肉が動いてくれない。

「ようやく大人しくなったか……」

ガリのつぽは左手で私にナイフをつきつけたまま、器用に右手のみで私の服を脱がしていく。

嫌だ、やめろ、私に触るな。

頭ではそう思っているのに、体は魔法にでも掛かってしまったかのように全然動いてくれない。

私が抵抗しないのをいい事に、ガリのつぽはついに私の素肌に触れた。

途端、触られたところから形容しがたい嫌悪感が体中に広がっていく。

「触るな！」

随分とうわずった声だ。

怖さに気持ち悪さが勝ったためか、動かなかった体が動いた。勢いよく振り上げた手が相手の顔を打つ。

「てめえ！」

あ、と思った時には遅かった。

ガリのつぽは鬼のような形相に変わり、左手に持っていたナイフを素早く右手に持ち替え、そして私に振り下ろした。

一瞬の出来事のはずなのに、刺されると思った時と刺されたと思
った時の間には確かに間があった。

頭で理解して、その後に熱さが私の腹部に広がる。あんまり痛み
を感じない。

けれど確かな違和感を覚えているし、なによりも私はこの目では
つきりと見ているのだ ナイフが振り下ろされる瞬間を。

あまりの事に、自分の身に起きている事が夢か現実かわからない。
段々と意識がフワフワしだし、声や音が小さくなっていく。体は
すでに横たわっているはずなのに、
さらに床にめり込んでいく感じがする。

目も……開けていられない。

落ちていく意識に逆らえず、私は気持ちのいい眠りについた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5394s/>

幽霊だって

2012年1月6日14時46分発行